

鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(5)

基幹市町村道整備(県代行)事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

竹牟礼遺跡

1993年3月

鹿児島県立埋蔵文化財センター

序 文

この報告書は、基幹市町村道整備（県代行）事業に先だって、鹿児島県立埋蔵文化財センターが実施した竹牟礼遺跡の緊急発掘調査の記録です。

竹牟礼遺跡は、鹿児島湾奥始良郡蒲生町北部の盆地内にある縄文時代と歴史時代を中心とした遺跡で、槍先形尖頭器が表採された遺跡として知られています。

今回の調査では、縄文時代晩期の土器、歴史時代の掘立柱建物や土器などの多くの資料を提供してくれました。

本報告が、地域の歴史研究や文化財保護のために活用されることを願ってやみません。

終わりに、この発掘調査に御協力をいただいた加治木土木事務所や関係者並びに蒲生町・蒲生町教育委員会および地元の皆様に心から感謝いたします。

平成5年3月

鹿児島県立埋蔵文化財センター
所 長 大久保 忠 昭

報 告 書 抄 録

フリガナ	たけむれいせき					
書名	竹牟礼遺跡					
副書名	基幹市町村道整備（県代行）事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告					
巻次						
シリーズ名	鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書					
シリーズ番号	5					
編著者名	立神次郎 中村和美					
編集機関	鹿児島県立埋蔵文化財センター					
所在地	〒899-56 鹿児島県始良郡始良町平松6252					
発行年月日	1993年3月31日					
フリガナ	たけむれいせき					
所収遺跡名	竹牟礼遺跡					
フリガナ	あいらぐんかもうちょううるしたけむれ					
所在地	始良郡蒲生町漆竹牟礼					
調査期間	19920602～19920709					
調査面積	2128㎡					
調査原因	基幹市町村道整備（県代行）事業					
出土遺物・遺構等	主な時代	主な遺構	主な時代	主な遺構	出土量	特記
	古代	掘立柱建物2棟 溝状遺構 古道	縄文時代 古代 中世	早期土器（塞ノ神式） 晚期土器（刻目突帯文） 石器（石鏃・石錐など） 土師器・須恵器・墨書 土器・刻書土器など 瓦器・土師器など	2個体分 パンケース 2箱 パンケース 2箱 パンケース 10個	泥灰層 確認



第1図 竹牟礼遺跡の位置図 (5万分の1)

例 言

1. 本報告書は、平成4年度に実施した基幹市町村道整備（県代行）事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、鹿児島県土木部の依頼を受けて、鹿児島県立埋蔵文化財センターが実施した。
3. 発掘調査については、蒲生町教育委員会や加治木土木事務所工務三課の協力を得た。
4. 発掘調査や発掘調査報告書作成については、鹿児島県文化財保護審議会委員河口貞徳（考古学）、鹿児島大学森脇広（地理学）の両先生にご指導をお願いし、有益な教示と助言を受けた。
5. この報告書は、上記の方々の助言と協力を得て鹿児島県立埋蔵文化財センターが実施し、執筆は、立神次郎・中村和美が担当した。
6. 遺物の実測、トレース、写真撮影、編集については、立神次郎・中村和美が行い、遺物の整理・復元作業等は、鹿児島県立埋蔵文化財センターの整理作業員が行なった。
7. 本書で用いたレベル数値は、海拔絶対高で、挿図中の遺物番号は図版中の番号と一致する。
8. 本書で用いた地図は、鹿児島県所有と蒲生町所有のものを使用した。
9. 出土遺物の管理・保管は、鹿児島県立埋蔵文化財センターで一括して取り扱っている。
10. 竹牟礼遺跡・出土の土製品に塗彩された赤色顔料についてを図版の最終に所収した。

本文目次

序文	
報告書抄録	
例言	
目次	
第I章 調査の経過	6
第1節 調査に至までの経過	6
第2節 調査の組織	6
第3節 調査の経過	7
第II章 遺跡の位置及び環境	8
第III章 発掘調査	13
第1節 調査の概要	13
第2節 層序	13
第IV章 縄文時代	17
第1節 調査の概要	17
第2節 出土遺物	17
第V章 歴史時代	36
第1節 遺構	36
第2節 出土遺物	42
第VI章 まとめ	51

挿図目次

第1図 竹牟礼遺跡位置図	
第2図 周辺の遺跡	11
第3図 竹牟礼遺跡の地形	12
第4図 土層断面図	14・15
第5図 グリッド配置図	16
第6図 出土土器実測図(1)	17
第7図 縄文時代出土遺物分布図	18~20
第8図 出土土器実測図(2)	21
第9図 出土土器実測図(3)	23
第10図 出土土器実測図(4)	24
第11図 出土土器実測図(5)	25
第12図 出土土器実測図(6)	26
第13図 出土土器実測図(7)	27

第14図	出土石器実測図 (1)	31
第15図	出土石器実測図 (2)	32
第16図	出土石器実測図 (3)	33
第17図	出土石器実測図 (4)	34
第18図	歴史時代遺構配置図及び出土遺物分布図	37~39
第19図	掘立柱建物実測図	40
第20図	遺構内出土遺物実測図	41
第21図	出土土器実測図 (8)	43
第22図	出土土器実測図 (9)	44
第23図	出土土器実測図 (10)	45
第24図	出土土器実測図 (11)	46
第25図	出土土器実測図 (12)	47
第26図	出土土器実測図 (13)	48

表 目 次

第1表	周辺遺跡一覧表	9・10
第2表	縄文時代土器観察表	29・30
第3表	縄文時代石器観察表	35
第4表	土師器観察表	50

図 版 目 次

図版1	1・2, 調査地及び周辺地形 (航空写真)	56
図版2	1・2, 調査地及び周辺地形 (航空写真)	57
図版3	1, 発掘調査風景 2・3, 遺物出土状況 4, 見学風景 5, 土層断面 7, 泥炭層 8, 掘立柱建物2号	58
図版4	1・2, 掘立柱建物1・2号 (航空写真)	59
図版5	1, 掘立柱建物1号 2, 溝状遺構 3, 墨書土器出土状況 4, 土器底部出土状況 5・6, 縄文土器出土状況 7・8, 出土遺物	60
図版6	1~8, 出土遺物	61
図版7	1~6, 出土遺物	62

第 I 章 調査の経過

第 1 節 調査に至までの経過

鹿児島県教育委員会では、埋蔵文化財包蔵地の実態を把握するため必要に応じて分布調査を各地ごと及び諸開発ごとに実施し、多くの遺跡が発見されている。

鹿児島県教育委員会及び蒲生町教育委員会は、文化財保護・活用を図るために諸開発関係機関と、事業着手前に文化財の有無等について協議し開発との調整を図っている。

この事前協議制に基づき、蒲生町経済課は町内の漆地区に団体営土地改良総合整備事業の計画にあたり、事業計画区域内の埋蔵文化財の有無について同町教育委員会社会教育課に照会した。同町社会教育課はこれを受け、平成 2 年 9 月に鹿児島県教育委員会と当該地区の埋蔵文化財の分布調査を合同で実施した。

その結果、同事業計画区域内において遺物の散布を確認した。また、同事業計画域の隣接地には、周知の遺跡である竹牟礼遺跡があり、昭和 24 年には槍先形尖頭器が採集されている。

そこで、遺跡の取り扱いについて、鹿児島県教育庁文化課、蒲生町教育委員会社会教育課、同町経済課の三者で協議した結果、同事業の着手前に遺跡確認調査を実施する運びとなった。

確認調査は、平成 3 年 4 月 22 日から 4 月 30 日までの実働 6 日間において実施し、3ヶ所の微高地部分に遺物包含層が残存していることが判明した。

確認調査の結果、遺物包含層が確認された地点を基幹市町村道整備事業（県代行）が県土木部（加治木土木事務所）により平成 4 年度に計画された。その取り扱いについて関係機関と協議した結果、今回、県立埋蔵文化財センターで発掘調査を実施する運びとなった。

第 2 節 調査の組織

調査主体	鹿児島県教育委員会		
調査企画・調整	鹿児島県教育庁文化課		
調査責任者	鹿児島県立埋蔵文化財センター	所長	大久保 忠 昭
調査企画者	〃	次長兼総務課長	水 口 俊 雄
	〃	主任文化財主事兼調査課長	戸 崎 勝 洋
調査担当者	〃	文化財主事	立 神 次 郎
	〃	文化財研究員	中 村 和 美
調査事務担当者	〃	主 査	下 園 勝 一
	〃	主 事	中 村 和 代
調査指導者	鹿児島県文化財保護審議会委員		河 口 貞 徳
	鹿児島大学法文学部助教授		森 協 広

第3節 調査の経過

竹牟礼遺跡は、平成3年度、確認調査の結果、3ヶ所において遺物包含層を確認した。平成4年度は、同事業区域内を基幹市町村道整備事業（県代行）が県土木部で計画されたために、記録保存のための調査を平成4年6月2日から平成4年7月9日まで実施した。

以下、調査の経過については、日誌抄をもってかえる。

6月2日から6月5日

2日より調査を開始する。第1地点については、水田跡地で草地のために、バックフォーにより表土剥ぎ作業を実施する。STAN_o254付近に第1トレンチ（2×12m）、第2トレンチ（2×12m）を設定し、掘り下げた結果、湧水が著しく、泥灰層や大小の礫層を確認する。第2地点については、バックフォーにより表土剥ぎを実施し、グリッドを設定する。表土の除去及びI d層より掘り下げる。土師器・青磁などの小破片が多数出土する。

6月8日から6月12日

第1地点は雨や湧水のため冠水する。第2地点は、グリッド設定継続作業。A・B-1～4区について掘り下げ。土師器・須恵器・石鏃・紡錘車などが出土する。

6月15日から6月19日

第2地点のA・B-4～6区、II層について掘り下げる。土師器・須恵器・石鏃・磨石などが出土する。全区について精査作業後写真撮影。A・B-5・6区について遺物出土状況平板実測・レベル実測作業。遺物取り上げ作業。第1地点の1・2トレンチともポンプによる排水作業及び精査作業。

6月22日から6月26日

第2地点のC・D-3・4区、II層について掘り下げる。土師器・須恵器・石鏃などが出土する。A・B-1～3区について遺物出土状況平板実測・レベル実測作業。遺物取り上げ作業。各区ともに遺物出土状況写真撮影作業。25日 森脇先生指導。

6月29日から7月3日

A・B-1～6区、掘り下げ作業。遺物出土状況平板実測・レベル実測作業。遺物取り上げ作業。A・B-1～4区の溝状遺構検出作業。A・B-3・4区、2×3間の掘立柱建物跡を検出する。A-3区、1×2間の掘立柱建物跡検出作業。各区ともに遺物出土状況及び遺構検出状況写真撮影を実施する。A-3区、古道、A・B-4区、溝状遺構検出作業。

7月6日から7月9日

A・B-4～6区、掘り下げ及び精査作業。遺物出土状況平板実測・レベル実測作業。遺物取り上げ作業。A・B-1～4区の溝状遺構実測作業。A・B-3・4区の2×3間の掘立柱建物跡実測作業。A-3区、1×2間の掘立柱建物跡実測作業。A-3区、古道及びA・B-4区、溝状遺構実測作業。各区ともに遺物出土状況写真撮影。9日で調査終了。

その間、蒲生町教育委員会、漆小学校児童、町文化財保護審議会委員など来跡。

第Ⅱ章 遺跡の位置と環境

竹牟礼遺跡の所在する蒲生町は、鹿児島県のほぼ中央部、始良郡の最西部に位置している。東側は始良町に接し、西側は薩摩郡祁答院町及び入来町と相接している。南側は日置郡郡山町及び鹿児島郡吉田町とに隣接している。

蒲生町の地形は、ほぼ三角形を呈する地勢で、北部から西部にかけては山地となり、北部から矢止岳（669.7m）、赤石岳（483.5m）、真黒岳（470m）、瀬戸平山（546m）などの山々が連なり、南東部に向けて穏やかに傾斜しながら低地の平野部となっている。一方、東部には青敷岳（275.8m）が所在している。河川は、西部や北部の郡境の山々に源を発し、山間溪谷を経て、前郷川や別府川が中小河川を集めながら、町の南東部の市街地を挟むような形で、下久徳付近で合流し、別府川となり錦江湾に流入している。

蒲生町は、土地利用の相違により上場地区と下場地区に区分され、本遺跡の所在する漆地区は上場地区にはいる。この上場地区は、蒲生町の78%に当たる大半の面積を占め、うち80%は山林で人口林が多く、集落は谷間や山間盆地に形成されている。耕地は水田で棚田が多く、畑地は普通畑、樹園地となっている。

竹牟礼遺跡の所在する漆地区は、町の北部の山地に位置し、北側に矢止岳、西側に赤石岳があり、これらの山々にとり囲まれた盆地が漆地区である。この盆地の中央部には、別府川がほぼ南北に流れている。

遺跡は、盆地の北西部の旭集落内にあり、赤石岳から北東方向に延びる台地裾部にあたる標高約165mの水田や畑地に位置している。遺跡のすぐ北側では、浦西川が別府川と合流し、この別府川は遺跡を囲むように蛇行している。

蒲生町は旧石器時代から中世の城館跡まで数多くの遺跡が確認されている。漆付近の遺跡について概観すれば、漆北西部の本遺跡内より昭和24年に旧石器時代の槍先形尖頭器が採集されている。基部がわずかに欠損するが、現存全長12.7cm、最大幅4cm、厚さ1.1cmを測る。素材は、玄武岩の横長剥片を使用している。漆北西部漆上集落にある楠木宇都遺跡は、昭和39年に発見され、前平式土器、吉田式類似土器、桑ノ丸遺跡3類土器、円筒形貝殻条痕文土器、平拵式土器、平拵式土器の可能性のある縄文が施文されているもの、押型文土器などが採集されている。高峯集落入り口付近の標高約150mの畑地にある木ノ原遺跡は、塞ノ神式土器が採集されている。漆東南部で、丘陵中腹にある標高約180mの畑地にある大嶺前遺跡では、縄文時代早期の円筒形貝殻条痕文土器、撚糸文土器、変形撚糸文土器などが採集され、集石遺構と考えられる遺構の存在もあつたとされている。漆東部で、宇都集落の大原入り口付近の標高約160mの畑地にある大原遺跡は、細石刃核や縄文時代早期の塞ノ神式土器、石鏃、磨製石斧、石匙、磨石、敲石などのほか土師器も採集されている。漆東南部で、広木集落の標高約100mの畑地にある広木遺跡は、塞ノ神式土器のほか石斧、石匙などが採集されている。漆中央南部で、宅地や畑地及び水田より縄文時代前期の深浦式土器のほか石斧が採集されている。漆の東部で、

表1 周辺の遺跡一覧表

番号	遺跡名	所在地	地形	時代	遺物等
1	楠ヶ字部	漆楠ヶ字部	山腹	縄(早期)	土器(押型文, 貝殻条痕文, 石坂式) 石斧
2	竹牟礼	漆竹牟礼	台地上	不明	石槍
3	大嶺前	漆大嶺前	丘陵端	縄(前)	土器(押型文, 貝殻条痕文)
4	大原	漆宮田前	台地上	不明	土器, 石斧, 石鏃, 石匙
5	広木	漆広木	台地上	縄(前)	土器(塞ノ神式) 石鏃
6	宮下	漆西ノ堂	平地	不明	土器, 石斧
7	中福良	白男中福良	台地上	不明	石斧
8	高牧	久末高牧	台地上	不明	土器
9	中福良	白男中福良	台地上	弥(後)	土器
10	前郷川	白男中福良井ぜき	川	弥(後)	石斧
11	下久徳	下久徳南天園	台地上	弥(後)	土器
12	下久徳下	下久徳尾前窯横	平地	弥(後)	土器
13	法寿寺跡	上久徳川東中	台地上	室町	蒲生どん墓
14	永興寺跡	上久徳宮内	平地	室町	
15	千手院跡	上久徳迫東	平地	室町	海重和尚墓, 板碑
16	正考庵跡	上久徳川東前	台地上	室町	石棺をもつ五輪塔
17	神護院跡	上久徳川東前	台地上	江戸	住僧墓
18	テグシ跡	漆中村	平地	鎌倉	五輪塔, 板碑
19	竜譚寺跡	上久徳迫	台地上	室町	開山和尚墓
20	重栄寺跡	上久徳迫上	台地上	安土桃山	文祿之役戦死墓
21	久目神社	北	平地	不明	四天王石像2体
22	竜ヶ城跡	久末と下久徳	山	平安~戦国	城門跡, 城門扉枝, 土器, 本丸, 二ノ丸, 大手, 搦手, 水之手
23	荒平平陣	久末	山	戦国	
24	尼ヶ城跡	下久徳	山	戦国	
25	馬立陣城	上久徳川東	山	戦国	
26	貝皿陣跡	上久徳川東	丘陵端	戦国	
27	向城跡	白男	丘陵	戦国	
28	平ノ城跡	白男	丘陵	戦国	
29	菱刈陣跡	米丸と北	丘陵	戦国	菱刈重豊の首塚
30	平之城跡	米丸	平地	戦国	
31	堂ノ平	米丸	山	不明	
32	北村城跡	北	山	戦国	古銭石臼, 土器
33	掛橋陣跡	北	三陵端	戦国	
34	金原陣跡	白男新留	丘陵	戦国	
35	松坂城跡	米丸柵野	山	戦国	石臼, 水之手, 堀底道, 本丸
36	遠江塁跡	漆竹牟礼	台地上	戦国	

番号	遺跡名	所在地	地形	時代	遺物等
37	松元城跡	漆中	山	戦国	
38	拵野城跡	漆大原	山	戦国	
39	切手園跡	漆切手園	山	戦国	
40	本南陣跡	漆荒田原	山	戦国	
41	松原陣跡	西浦小川内	山	戦国	
42	城ヶ崎跡	下久徳下	丘山陵	戦国	
43	タタラ跡	薄原松田製茶工場敷地	丘陵端	江戸	カナクソ
44	銅鏡	蒲生八幡神社	丘陵端	鎌倉	秋草双雀文様一面
45	蒲生のクス	蒲生八幡神社境内	丘陵端	千数百年と推定	
46	漆の庚申塔	漆大嶺前1798-1	山頂	室町	船形石刻塔 1
47	下久徳の田の神	下久徳三池原	平地	江戸	
48	漆の田の神	漆漆下	平地	江戸	
49	御飯屋門一棟	上久徳2241町保育所正門	丘陵端	江戸	
50	御飯屋イヌマキ	上久徳2399町役場敷地	平地	400年と推定	
51	御飯屋文書837点	白男347町中央公民館	平地	江戸～明治	
52	蒲どん墓	川東法寿寺墓地	台地上	室町	
53	籠ヶ城跡(千貫字弘蹟)	下久徳城山	城山の岩壁	室町	
54	仁加木	漆仁加木	台地	縄文, 古墳	縄文式, 成川式
55	山口田	米丸山口田	台地	歴史	土師器
56	山口	北山口	沖積地	古墳, 歴史	成川式, 土師器
57	宮内	上久徳宮内他	沖積地	古墳, 歴史	土師器, 青磁
58	剣御前	上久徳剣御前他	沖積地	古墳, 歴史	成川式, 土師器
59	三池原	下久徳三池原他	沖積地	歴史	土師器
60	長緑	下久徳長緑	段丘	古墳	成川式
61	石峯	久末石峯	段丘	縄, 古, 歴	縄文式, 成川式他
62	高牧第1	久末高牧	台地	縄, 古, 歴	縄文式, 成川式他
63	高牧第2	久末高牧	台地	縄文	塞ノ神式土器

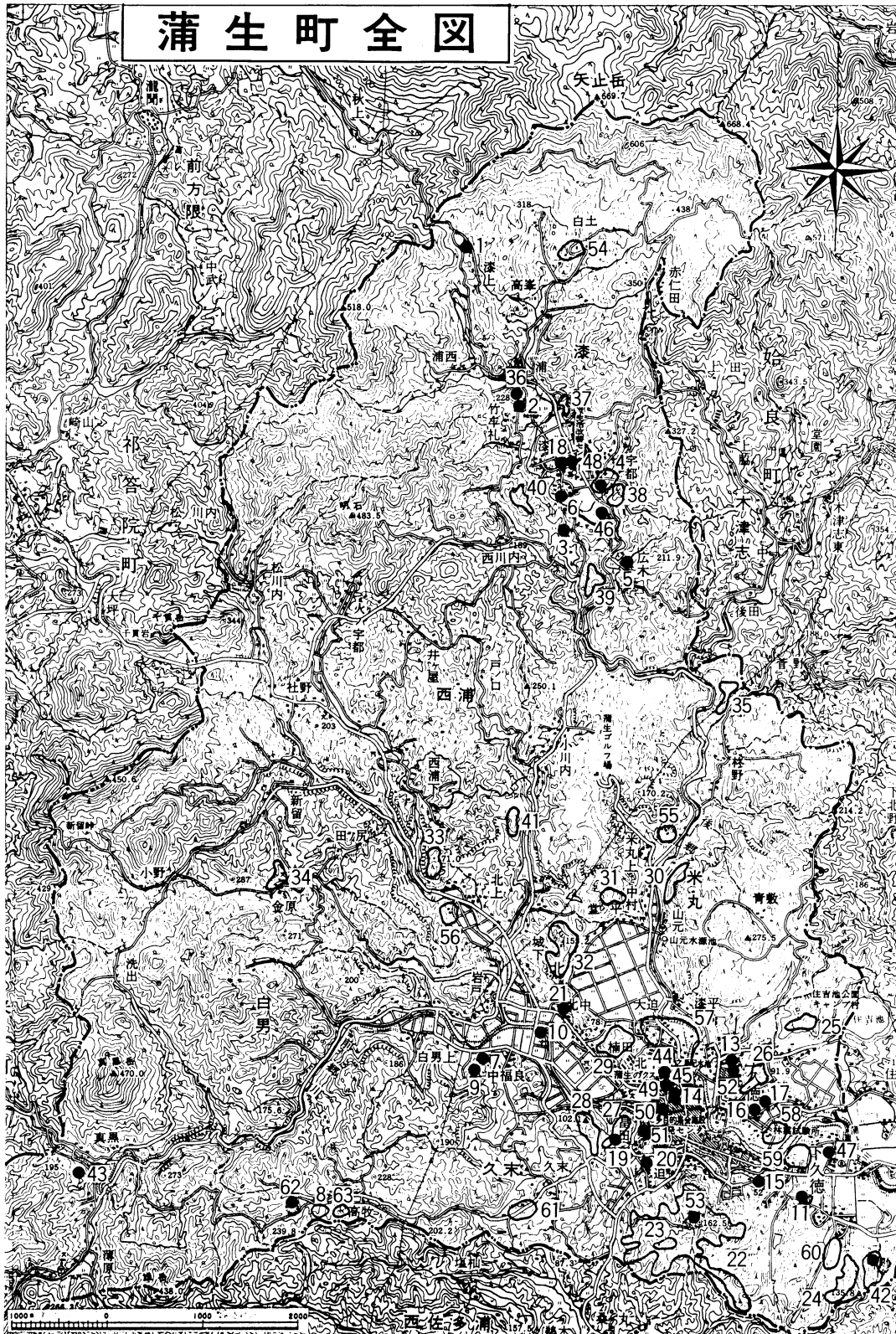
宇都集落大原の北東端部で、標高約120mの畑地と水田にある欒木ヶ迫遺跡では、土器破片、石鏃などが採集されている。このほか、蒲（石斧）、権現（石斧）、中村（石斧）、大窪（磨石）、ニガキ（石匙）、大平（縄文土器、石斧）、神如塚（石斧）などより遺物が採集されている。

引用・参考文献

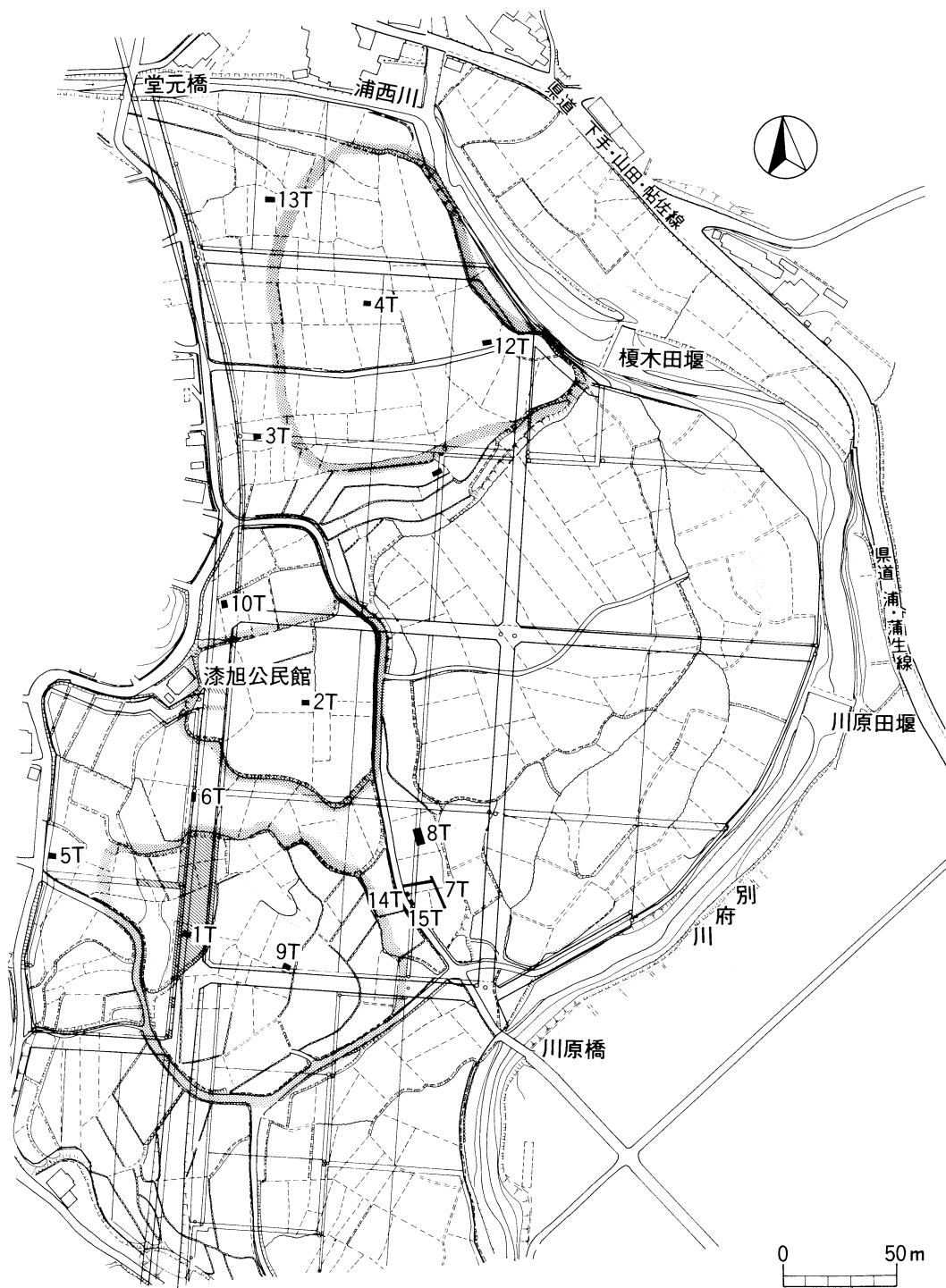
蒲生郷土誌編纂委員会『蒲生郷土誌』蒲生町1991

蒲生町教育委員会 「竹牟礼遺跡」蒲生町埋蔵文化財発掘調査報告書(1) 1192・3

蒲生町全図



第2図 周辺の遺跡



第3図 竹牟礼遺跡の地形

第三章 発掘調査

第1節 調査の概要

本遺跡の発掘調査は、本年度、基幹市町村道整備事業が計画されたために、漆地区団体営ほ場整備事業に伴う確認調査の結果に基づき、計画予定路線内の2地点において実施した。

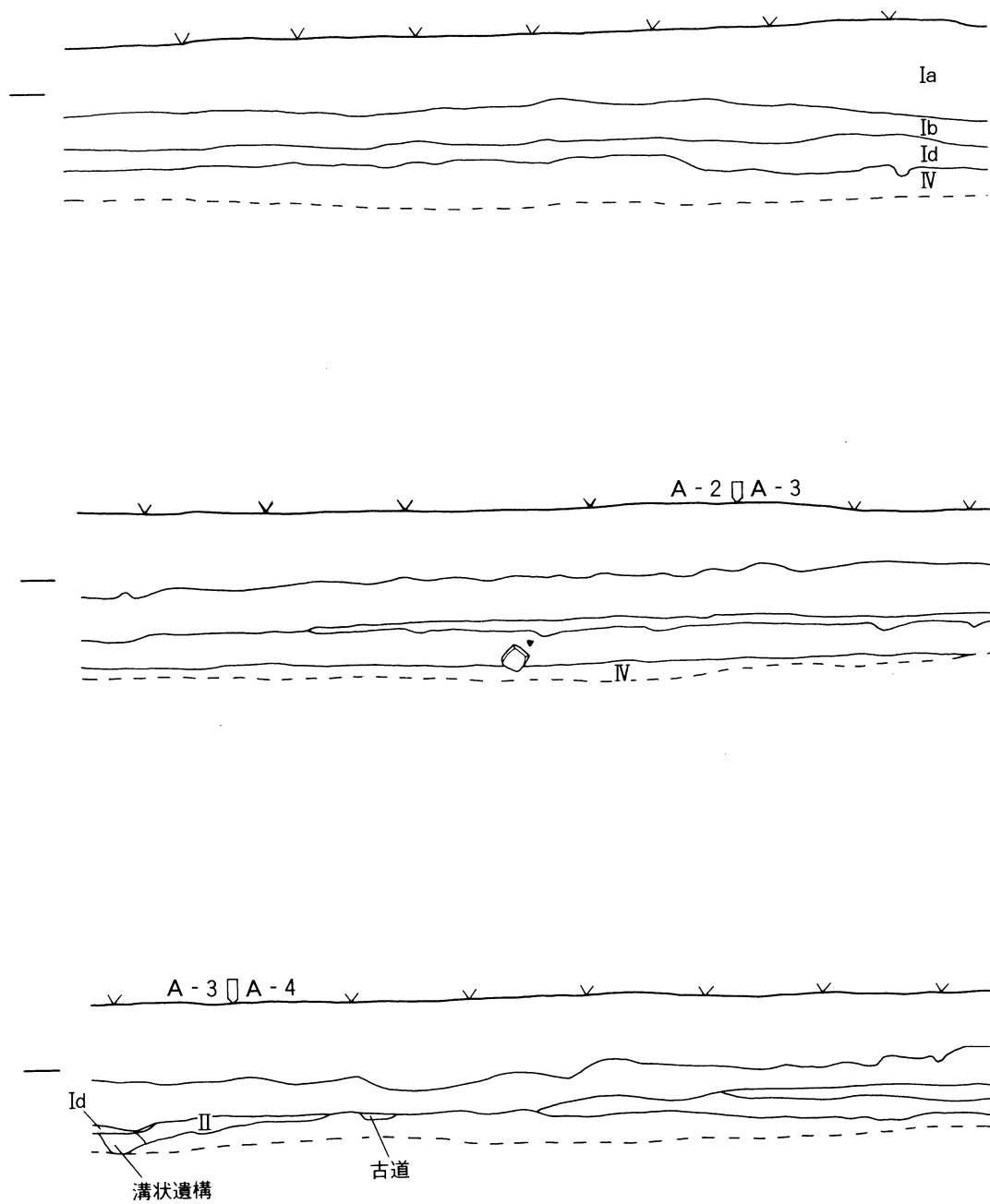
1地点の調査は、旭公民館に隣接する計画路線内が水田のために、さらに、層堆積状況と遺物包含層の再確認を主目的として2×12mのトレンチを2本設定した。調査の結果、表土（水田耕作土）、灰白色シルト層、黒色シルト層（泥炭層）、礫層となり、表土より遺物の小破片が若干出土したのみで、2本のトレンチとも湧水のために冠水した。

2地点の調査は、畑地と水田が調査地となり、道路建設予定地内に10×10mのグリッドを設定して行なった。グリッドは、計画道路のセンターラインの東側約1mを基準に南-北側方向に1～6区、西-東側方向にA～E区を設定した。

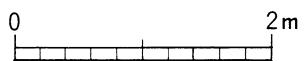
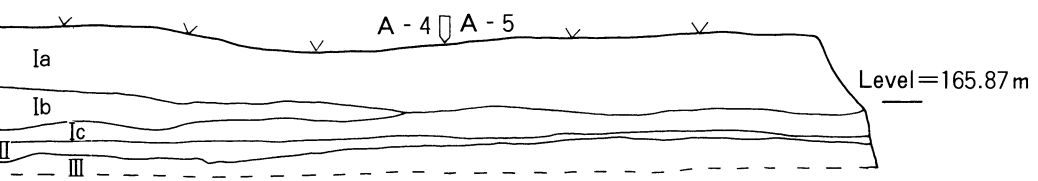
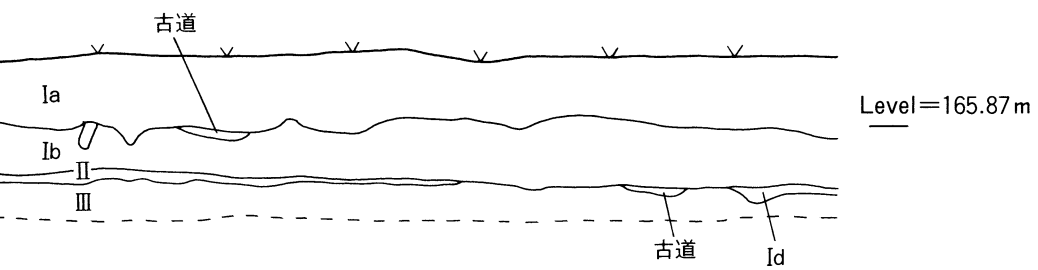
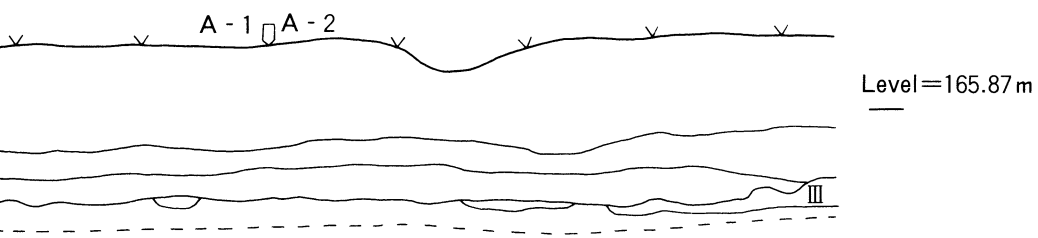
全面調査は、表土を重機によって排土し、I d層以下を人力で掘り下げた。調査の結果、遺跡地が東側から南西側へ傾斜しているために、かなりの客土があったり、IV層まで削平を受けている区もあった。II層は、歴史時代の土師器、黒色土師器、刻書土師器、墨書土師器、紡錘車、須恵器、瓦器、青磁、白磁などをはじめ一部縄文土器（刻目突帯文土器）も混在して出土した。III層は、縄文時代晩期相当の土層で、II層も残存不良であったために、後世の耕作等により削平や攪乱を受け、III層掘り下げ終了後に歴史時代の遺構が検出されたが、遺構の残存も不良であった。遺構は、掘立柱建物跡2棟のほか土壇、溝状遺構、古道、ピット、焼土などを検出した。IV層より縄文土器（早期）が2ヶ所より集中して出土した。

第2節 層序

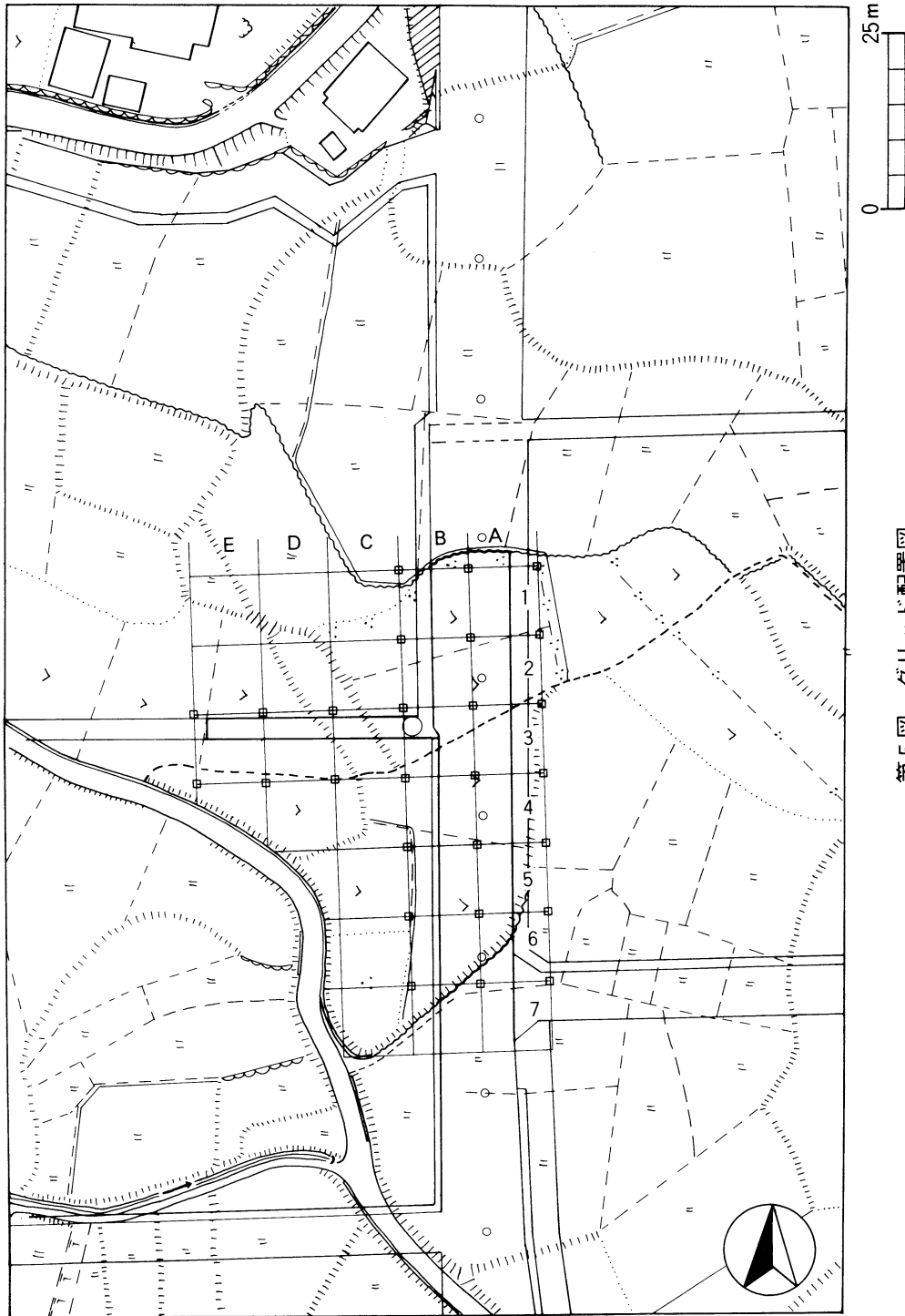
- I 層 a層暗灰色土（現耕作土）、b層暗灰色シルト質土、c層暗灰色土、d層黒灰色土の4分層され、畑地造成土でシラスの二次堆積土のような土質で、シラスや白色軽石を含み、やわらかく、しまりはない。ともに炭化物を含む。特に、d層は攪乱層で、白色軽石、II・III層の土質及び炭化物をも少量含む。
- II 層 黒色土。歴史時代の遺物包含層。場所によっては削平を受けている。
- III 層 橙色火山灰土。アカホヤの二次堆積土で、軽石を僅かに含むほか不純物を一切含まない。締まりはあるが、やわらかい。上部が暗く、下部が明るい、はっきり区別できない。縄文土器（晩期）が上部から出土する。
- IV 層 黄白色砂質土。粒の大きい黄白色軽石を多く含み、流水作用を受けているためか、下部の方が砂の粒子が粗く、軽石は上部にある。
- V 層 黒色シルト。以下、黒色粘質腐植土で、シラス、黒色や白色などのシルト層が互層をなしている。黒色粘質腐植土には植物繊維を多く含む。
- VI 層 砂礫層。小さい楕円礫から人頭大を越えるほどの自然礫を含んでいる。



第4図 土層断



面図



第5図 グリッド配置図

○ 泥炭層採集地点

第IV章 縄文時代

第1節 調査の概要

縄文時代の遺物包含層は、Ⅲ層及びⅣ層である。Ⅲ層は橙色を呈する火山灰土で、アカホヤ火山灰層の二次堆積土であり、軽石を僅かに含むほか不純物を一切含まない層である。また、しまりはあるが軟質で、細かく観察すると上部がやや暗く、下部は明色を呈するがはっきりと区別できない。Ⅱ層の調査終了後、A・B-1区側から逐次南側方向へ調査をすすめた結果、南西側にゆるやかに傾斜する地勢を成し、B-6区の一部は削平をかなり受けていた。

この層は、縄文時代晩期遺物包含層で、刻目突帯文土器破片が調査区全域に確認されるものの、南側にやや集中する傾向が見られ、出土量はそれほど多くなかった。中には、A-1区とB-5区の底部破片の接合する例もあり遺物の大きな移動が見られる。石器の素材も黒曜石、チャート、蛋白石などを素材とするもの、蛋白石を素材とする残核や剥片が多く、石器製作途中のものもある。

Ⅳ層は黄白色砂質土でシラスの二次堆積層で、粒の大きい黄白色軽石を多く含み、流水作用を受けているためか下部の方が粗く、軽石は上部にある。この堆積層に含まれている黄色の色調を呈する軽石は、もともと白色を呈していたもので長年を経て漸移し黄色したものである。

この層は、縄文時代早期の遺物包含層で、調査区全域に確認されたが、遺物の出土は2ヶ所に集中して出土したのみであった。

第2節 出土遺物（第6・8～17図）

1. 出土遺物の概要

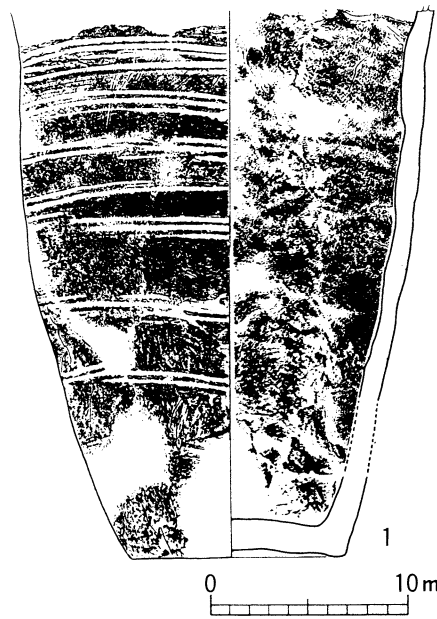
本遺跡の縄文時代では、Ⅲ層より縄文晩期の土器や石器、Ⅳ層より縄文時代早期の土器が出土した。これらの遺物は、後世の耕作等による削平を受けていたために、晩期の土器及び石器の一部は、Ⅰd層やⅡ層からも歴史時代の遺物とともに出土した。

Ⅲ層の土器は、刻目突帯文土器の深鉢、浅鉢、孔列土器、粗製の深鉢、鉢などのほか組織痕土器、高坏、土製加工品などが出土した。

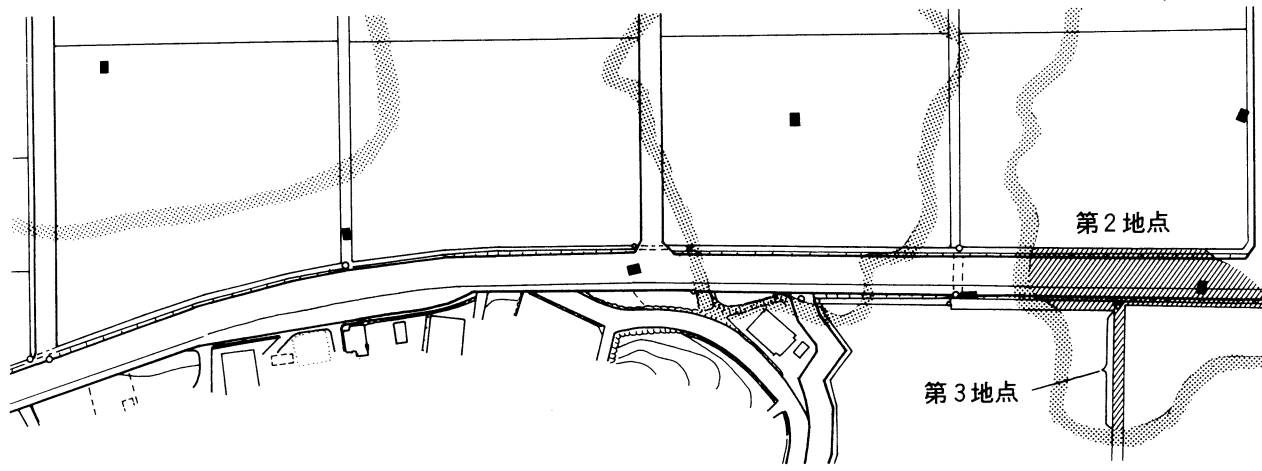
Ⅲ層の石器は、打製石鏃、石匙、石錐、磨製石斧、磨石兼敲石、石核、石槍、剥片石器、残核などが出土している。

Ⅳ層の土器は、塞ノ神式土器である。

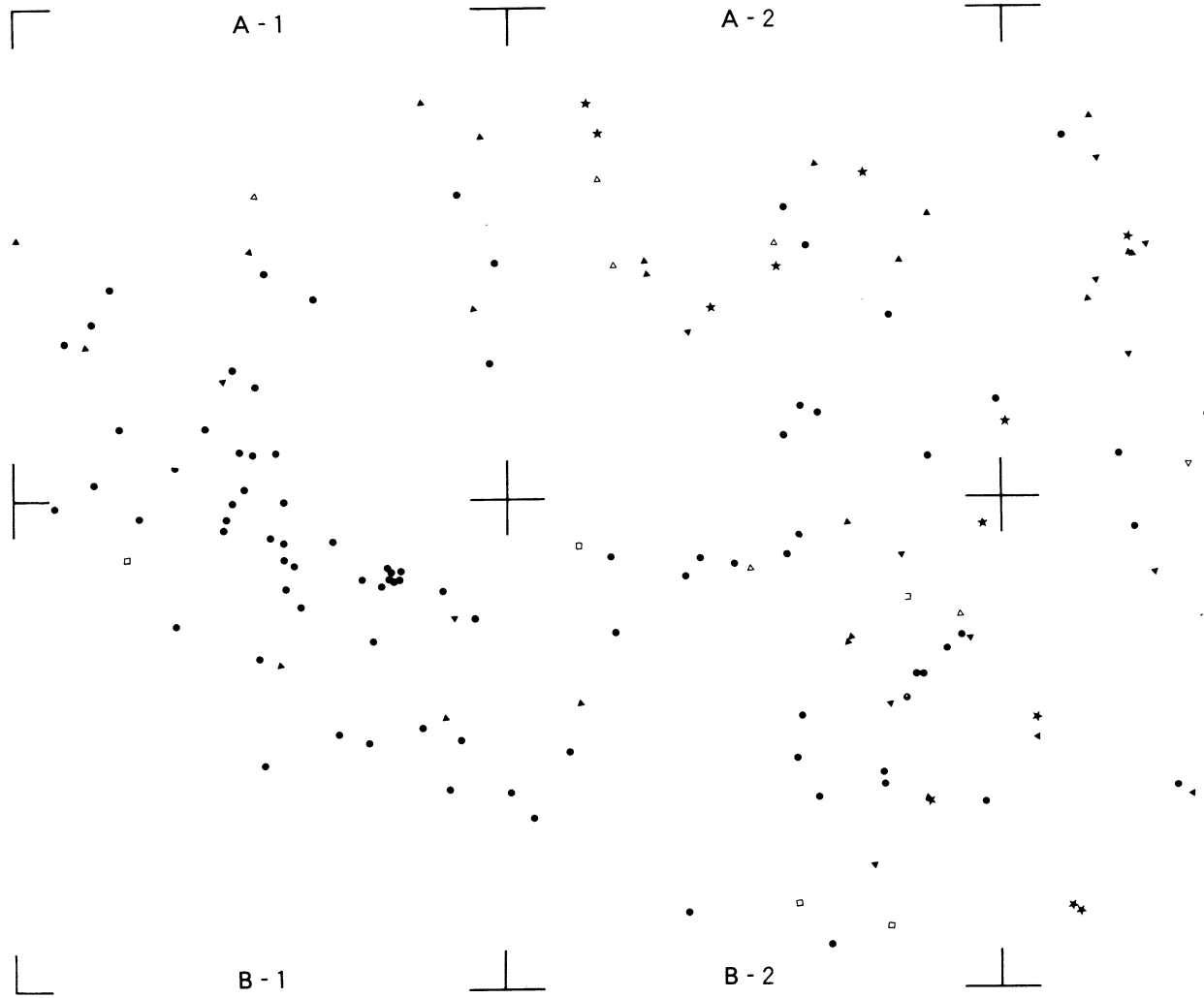
以下、縄文時代早期から説明を加える。

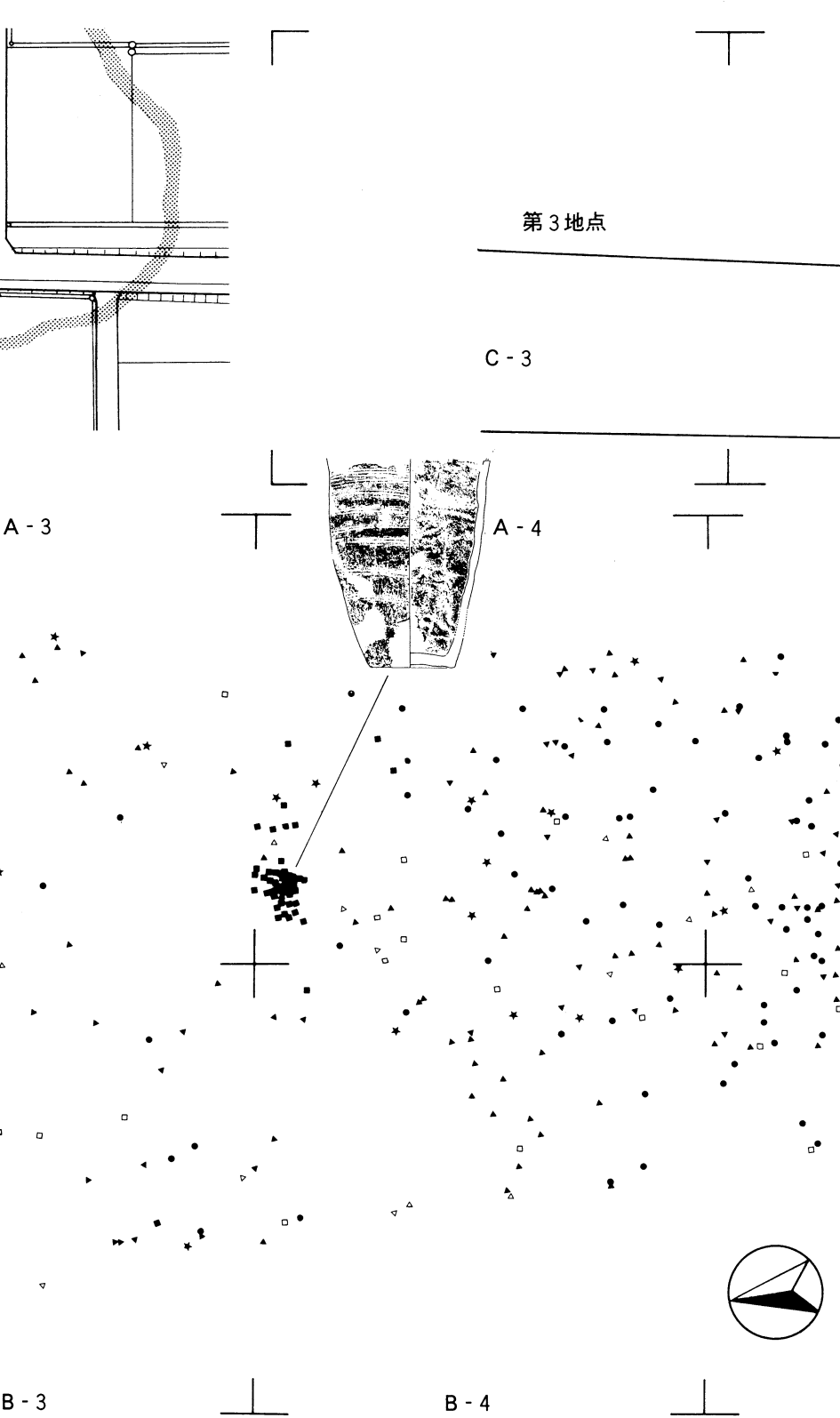


第6図 出土土器実測図(1)

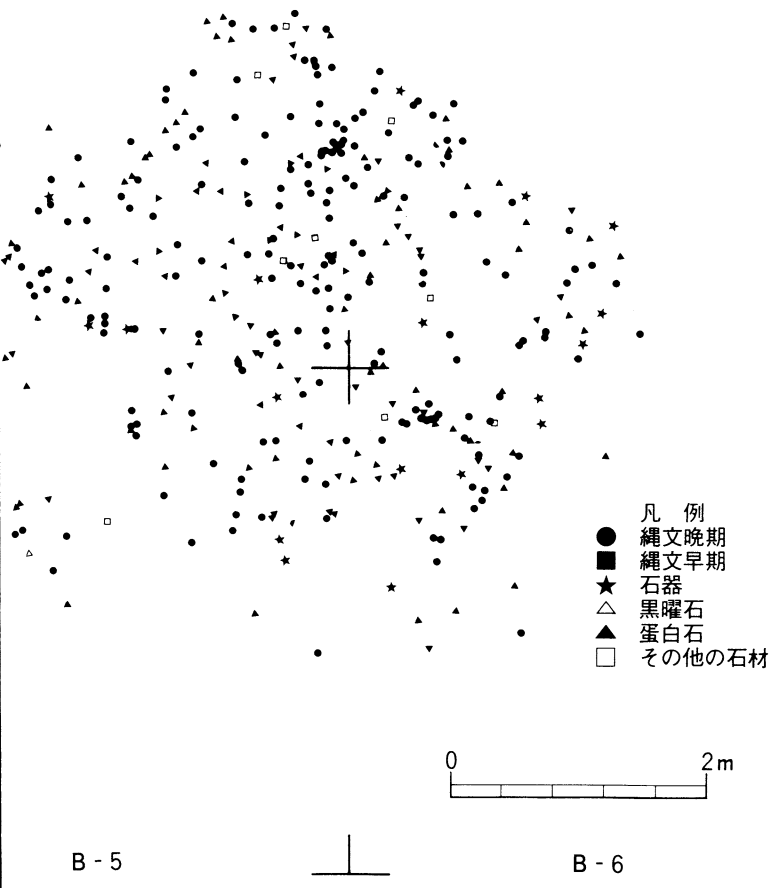
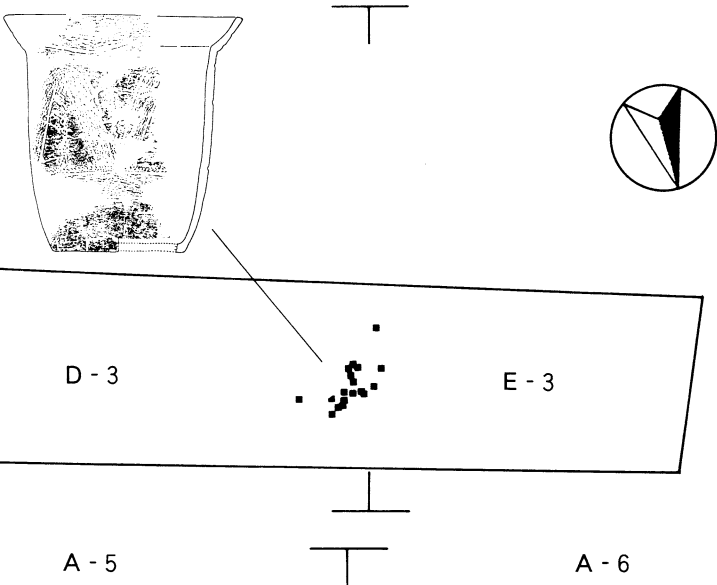


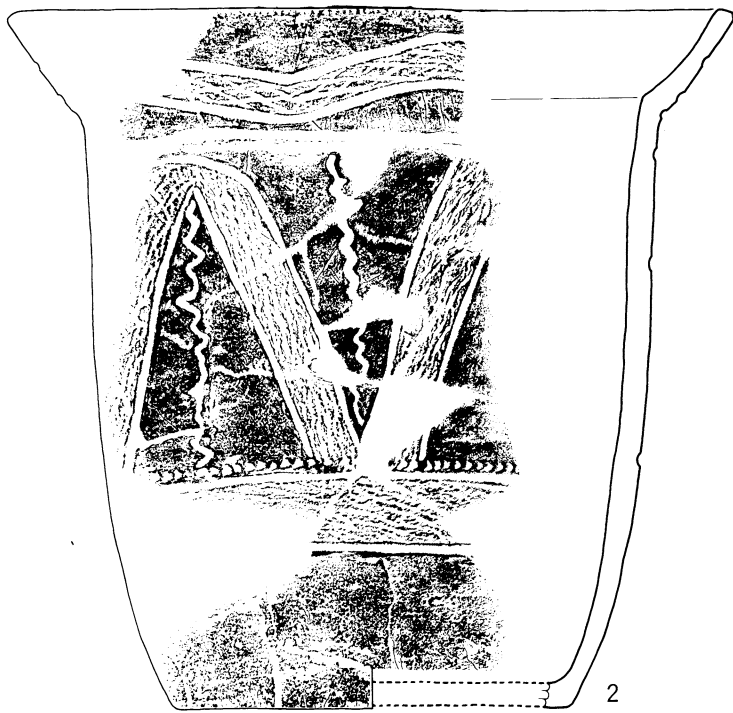
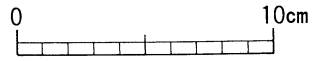
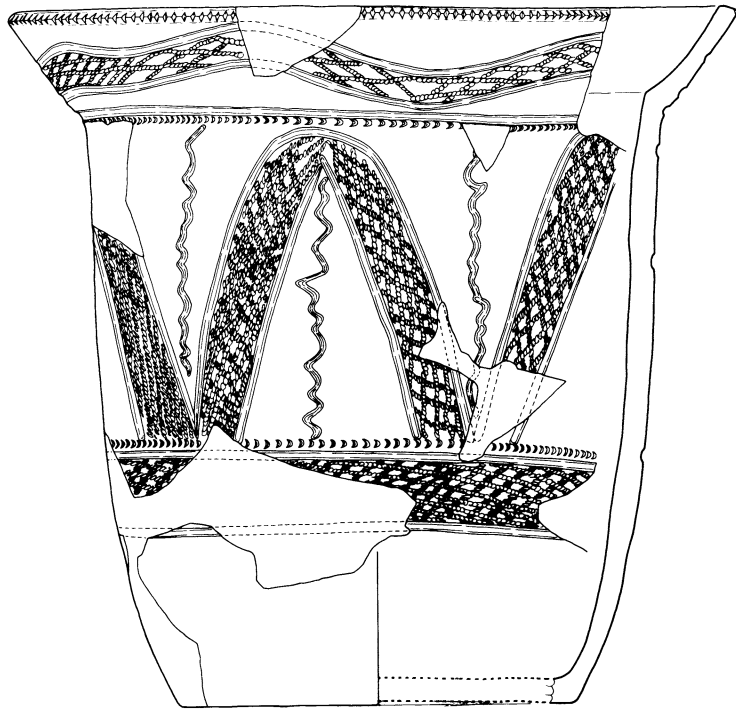
第2地点





第7図 縄文時代出土遺物分布図





第8图 出土土器实测图(2)

(1) 早期の土器

1は、口縁部が欠損しているが胴部はほぼ完形である。底部若干上げ底を呈した平底で、底径11.0cmを測る。底部から若干外開きに立ち上がり、胴部中央は膨らみ気味に丸みをもつ。内外面とも、粗いナデ整形で仕上げる。口縁形の形態は不明であるが、頸部が僅かに締まることから若干外反する程度で円筒形に近いタイプが考えられる。胴部の文様は、貝殻施文具による条線文帯を横位に間隔を置いて施文している。なお、現存する頸部下2cm程度のところに径1.2cm程度の2孔の円孔を外側から穿いている。補修孔である。

2は、底部が平底で胴部は円筒形を呈し、口縁部は内湾気味に外反する。器高は27.6cmを測り、底径15.6cm、口径28.6cmである。内外とも丁寧なナデ整形で仕上げています。文様は、凹線文の区画の中に網目捺糸文帯の上位には半截竹管状の施文具で刺突文を巡らせている。この文様帯以下は底部まで無文である。この文様帯から頸部までは同じ網目捺糸文を鋸歯状に連続して施文する。鋸歯状間と鋸歯状内の無文部には、凹線文を縦位に流水状の施文で華麗さを表現している。頸部には半截竹管状の施文具で刺突文を横位に連続し、その上位には同じく横位に凹線文を巡らせている。口縁部外側には網目捺糸文帯を波状に施文する。口唇部先端には刻目を施す。なお、胴部の網目捺糸文は網み目が密でありRの撚りである。口縁部の網目捺糸文は網み目が大きくLの撚りであり、二種類の異なる施文具を使用していることになる。

(2) 晩期の土器 (第9～13図、図版)

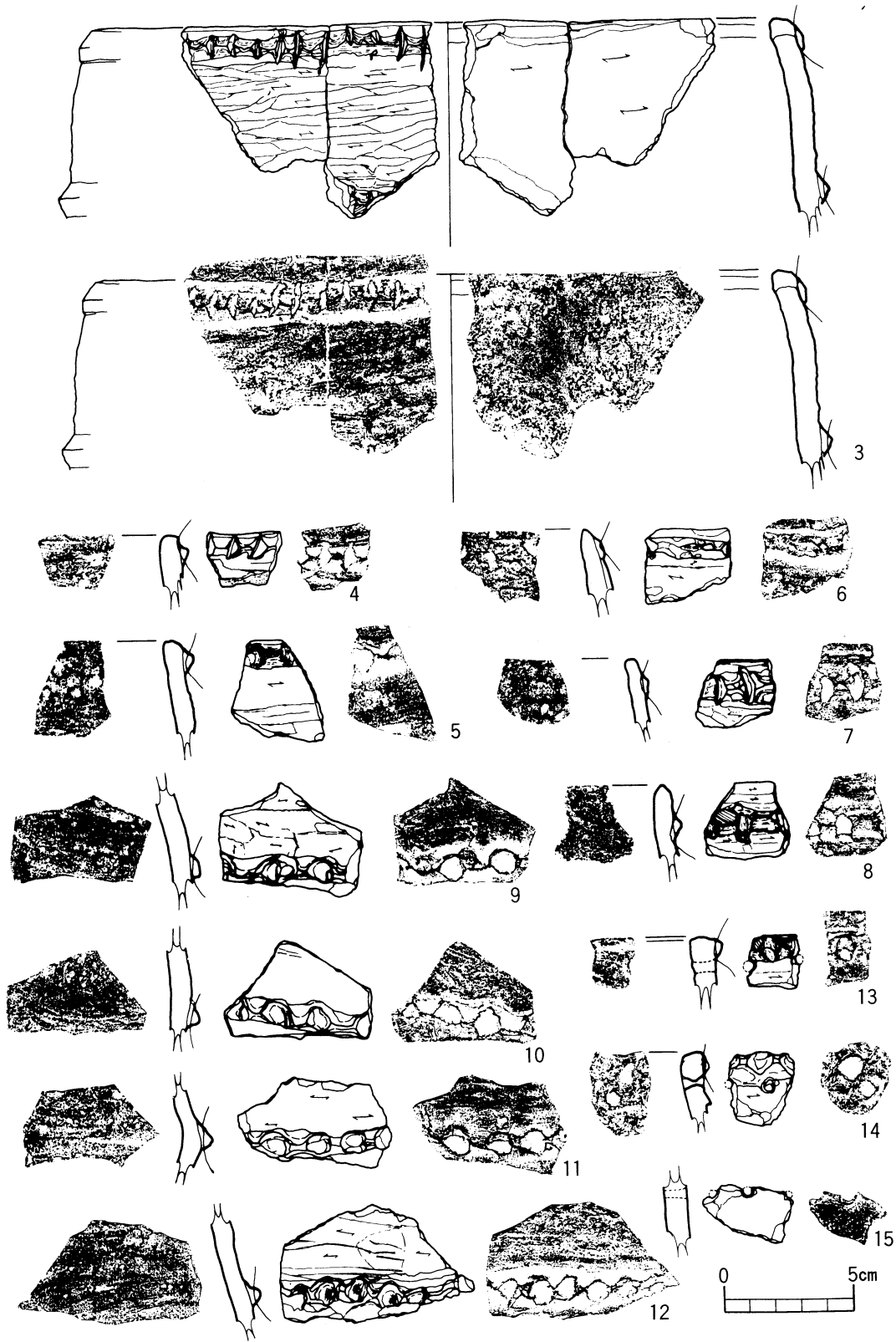
晩期の土器には、刻目突帯文土器、孔列文土器、組織痕土器などがあり、深鉢形土器、鉢形土器、浅鉢形土器、高坏形土器、壺形土器などがある。これからの資料の多くは、小破片のために全体的な器形を知り得ない。また、傾きや器種などにも疑問が残るものばかりである。そこで、図化した資料で判別可能なものについては器種の特定を行なったが困難なものも多い。

口縁部付近や屈曲する肩部付近の状況については、刻目突帯文をもつものと刻目突帯文をもたないものがある。刻目突帯文をもつものは、3～6、8～14、16～18、25、26、29、32～42、46～50で、刻目突帯文をもたないものは、27、28、30、31、43～45がある。

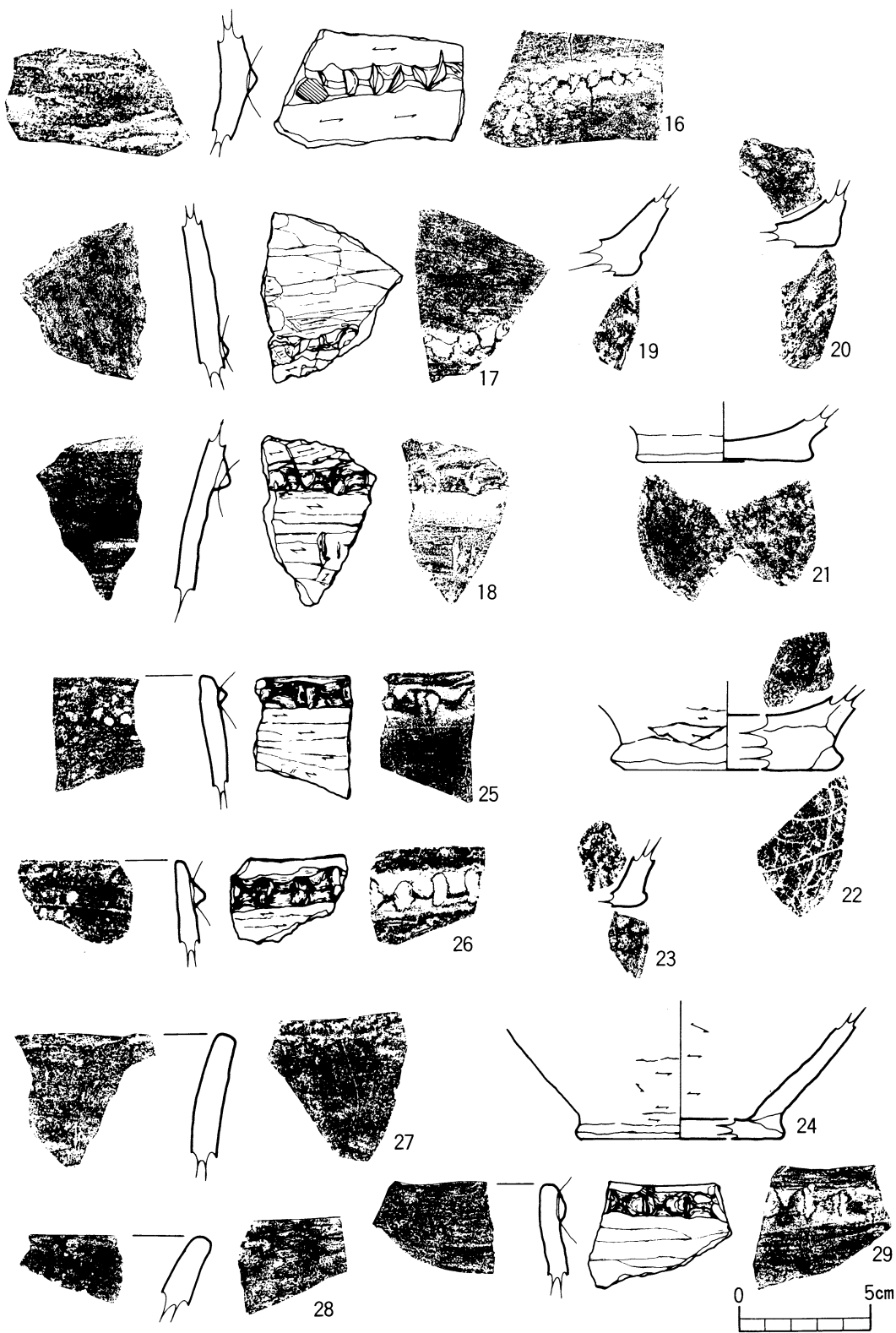
図化した範囲で口縁部に刻目をもつものには、3、6、8、13、14、25、26、29、32～42がある。その部位は、3、5、7、13、14、25、27、32、33、36～39、41が口縁部直下にもつもので、8、26、34、35、42が口縁部直下よりやや下位にもつものであり、屈曲する肩部付近に刻目をもつものには、3、9、10、11、12、16～18などがある。3は両方に刻目をもつもので欠損しているが他の資料にも類推できるものがある。

6は突帯をもつ刻み目の不明瞭なもので、口唇部が尖り他の資料に比し雰囲気を変にするものである。13～15は刻目突帯文をもつ孔列文土器が考えられる資料である。ただし、小破片のために僅かに孔列の痕跡をとどめ、15は孔列より上位を欠損している。ともに円孔部分より破損し、円孔は両側から穿られ、円孔間は約1.0cm～約1.5cmを測る。

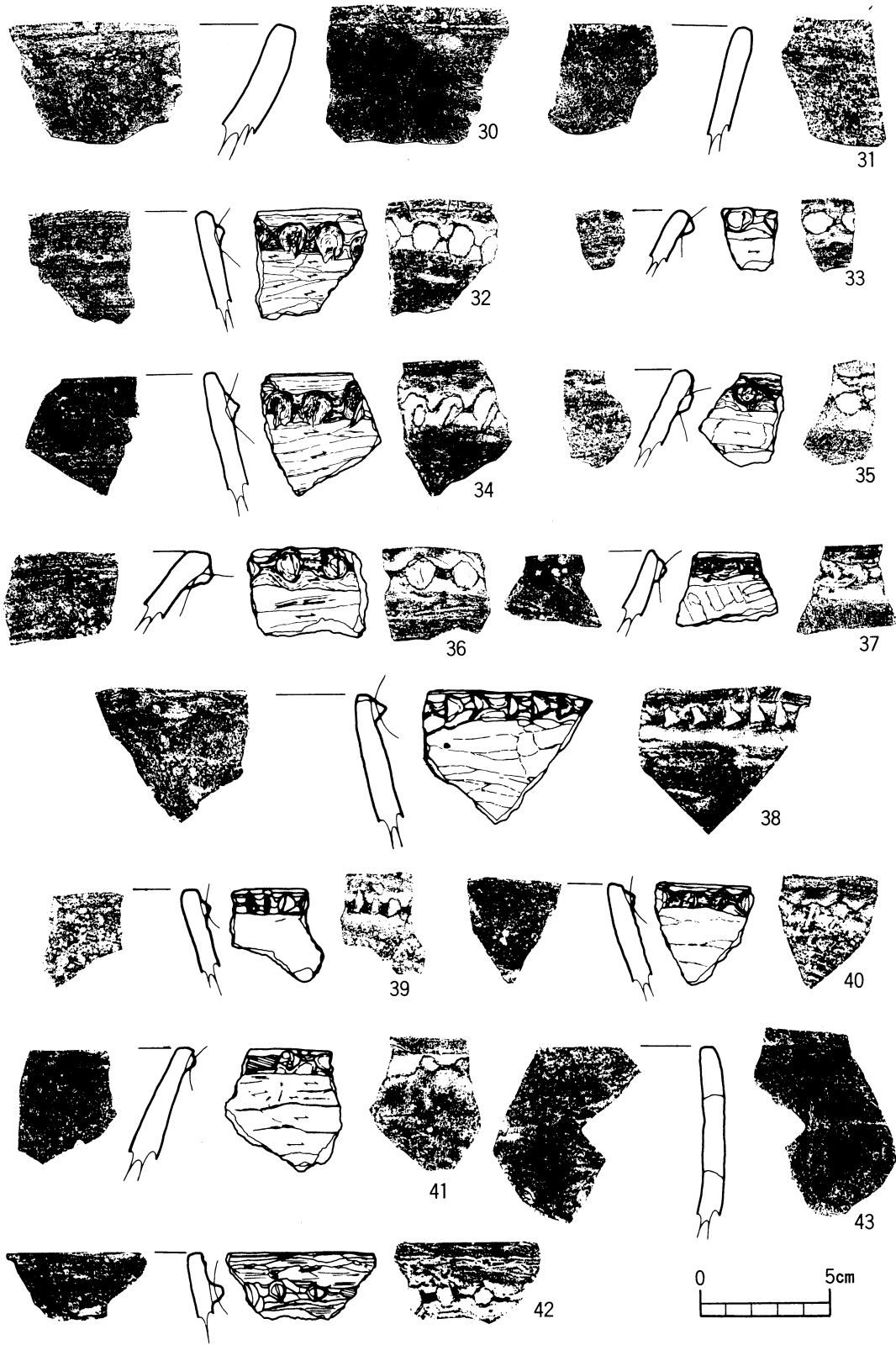
刻目突帯文土器の器形は、口縁部破片が屈曲する肩部などの小破片のために全体像はつかめないが、内傾するもの、直口気味なもの、外反するものなどがあり、調整では研磨を施すもの



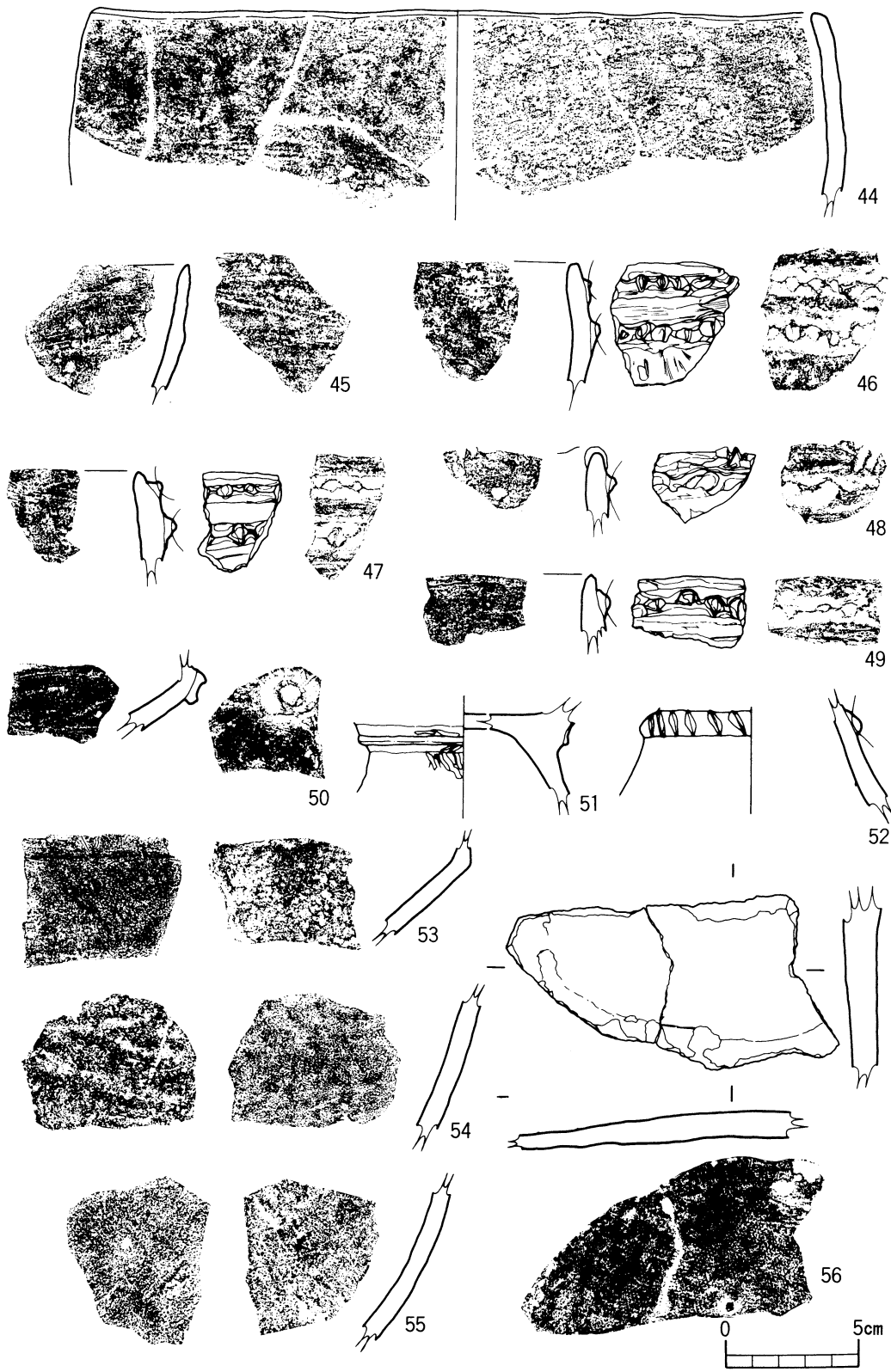
第9图 出土土器实测图(3)



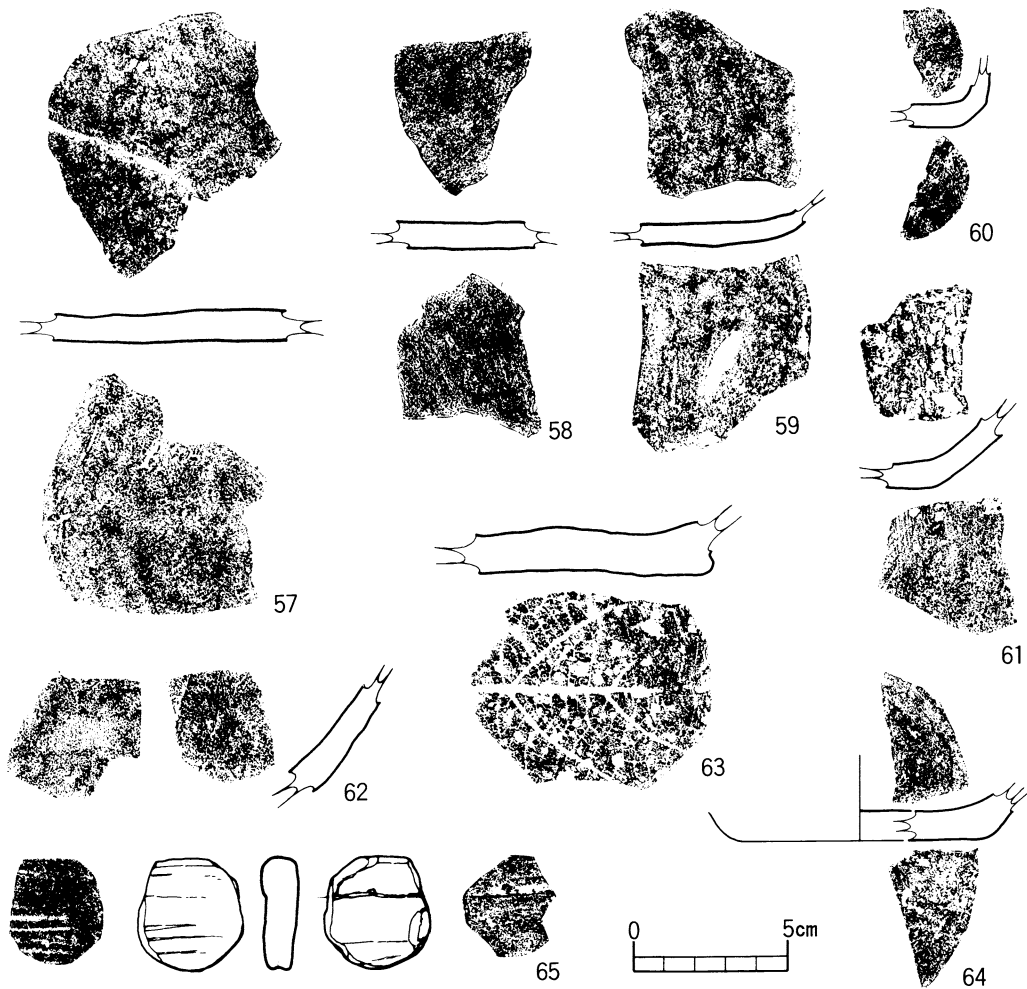
第10图 出土土器实测图(4)



第11图 出土土器实测图 (5)



第12图 出土土器实测图(6)



第13図 出土土器実測図 (7)

と施さないものがある。これらほとんどの資料には、濃淡こそあるが煤の付着が観察でき、深鉢形土器の様相をもつものが多い。

刻目突帯文の部位は口縁部直下か屈曲する肩部付近にある資料が大半で、口縁部直下にもつものは、口縁部直下かやや下方にあるものである。刻目突帯文を両方にもつものも屈曲する肩部付近の刻目突帯文は僅かにしか残存してないために全容は不明である。

その突帯は、上下両側から押さえて施するため断面が二等辺三角形になるものが多く、その刻目の布設時に変形したものもある。突帯上の刻み目には、3、4、38のようにヘラ状工具によりねかせて突帯におしつけて刻みを施すもの、16、39のようにヘラ状工具を垂直に立てて刻むもの、9～15、18、25、29、32～36、42のように指頭を横位に刻みを施すもの、8、16のように棒状工具により下から上方向へ段状に刻みを施すものなどがある。これらの資料には刻み目の施しの強弱によりそれぞれの痕跡を残しているようであるが詳細は不明である。

27, 28, 30, 31, 43~45は、刻目突帯文をもたない資料で、27,28, 30, 44は器面に希薄なものもあるが煤の付着を認め、44は復元口径27.9cmを測る。

46~49は小型鉢形土器で、刻目突帯の部位は45, 46が口縁部外側直下とその下方にあり、48, 49は口縁部外側直下よりやや下位にある。刻み目は、ともに指頭を斜位に刻みを施すもので、僅かな刻み目である。さらに、48の刻目突帯より上位に突起状の粘土帯を貼り、ヘラ状施文具で外側から内側へ2条の刻みを施している。

50, 53は浅鉢の屈曲する肩部付近からその下位が、54, 55は器種が不明であるが肩部から底部までのあいだが考えられる資料である。

底部の資料は、19~24, 63, 64のような平底を呈するものと、56~59のような資料で、底部径は21が6.1cm, 22が9.0cm, 24が8.1cmをそれぞれ測り、22・63は木葉痕を有するもので、葉脈まで鮮明に観察できる。56~58は内面が丁寧にヘラミガキにより整形され、56は、布目圧痕文が施され、60~62は底部付近の破片がある。

51は高坏形土器で、坏部と脚部との境付近に突帯をもつが刻み目をもたない資料で、52は壺形土器で、突帯にヘラ状工具による刻み目を1条もつ頸部付近が考えられる資料である。

土製加工品(65)は、土器片を利用して円形に加工したものであり、用途は不明であるが、通称メンコと呼ばれるもので、煤の付着している深鉢形土器の口縁部破片を用い、円周加工は打ち欠いただけのものである。

(3) 石器

石器には、石鏃、石匙、石錐、異形石器、磨製石斧、磨石兼敲石、剥片石器、石核、石槍、残核などが出土している。このほか、蛋白石を中心とした残核や剥片がみられた。これらの石器には、蛋白石31、頁岩4、安山岩2、黒曜石1、チャート2、シルト石2、砂岩1を素材として用いており、蛋白石の原産地に近いため多く用いられている。

石鏃は、表採品を含めて28点の出土があり、後世の耕作等によりⅡ層上位までの層やⅢ層も場所より乱れていたためか、Ⅰd層より5点、Ⅱ層より9点、Ⅲ層より11点が各層より出土し、このほか2点も表採されている。

石鏃の形状は、66~69, 73, 74, 76, 77, 80, 85, 86, 88が三角形状を呈するもので、70, 71, 72, 79, 82~84, 87, 89, 90, 91が二等辺三角形状を呈するもの、75, 78, 81が欠損して不明なもの、92, 93, 94が作りかけのもので不定形を呈するものなどがあり、欠損しても推定できるものは、それぞれに含めた。これらの石鏃の基部が凹状のものには、73~77, 80~84がやや窪むもの、86, 89~91は大小の変化はあるがU字状のものと87はV字状のものがある。これらの資料には、基部が平坦状を呈するもので、66~70, 78は側縁が平坦かやや膨らむものと71, 74は側縁が強く膨らむもので、72は側縁が若干窪むものがある。基部が凹状を呈するもので、76, 77, 80, 82, 84, 86~90は側縁が平坦かやや膨らむもの、73, 74, 79, 85は側縁が強く膨らむもの、83, 91は側縁が若干窪むものがある。

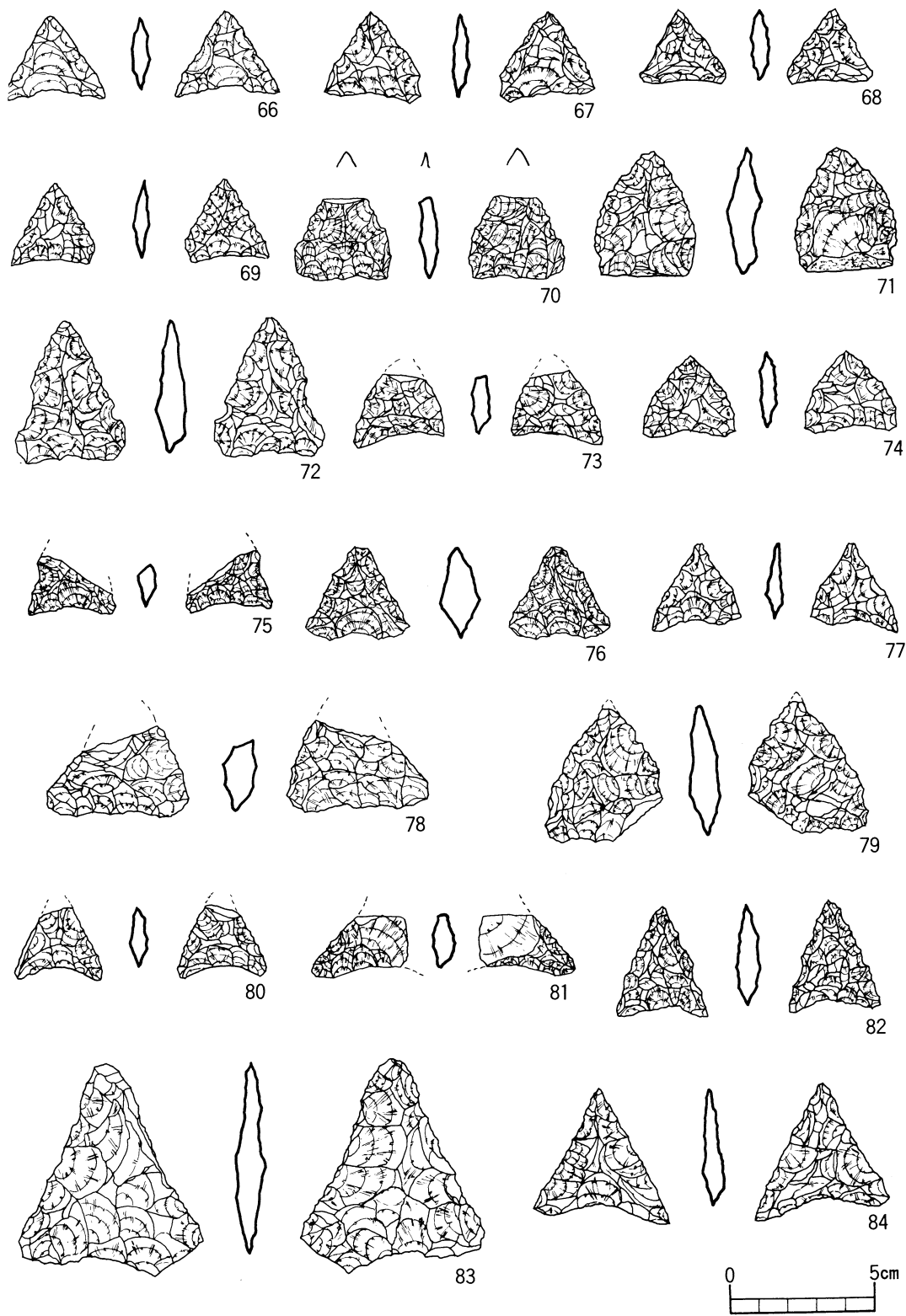
96は石匙である。横長の形状を呈し、つまみ部を僅かに残した破損品で、片側は大きい剥離

第2表 出土土器観察表

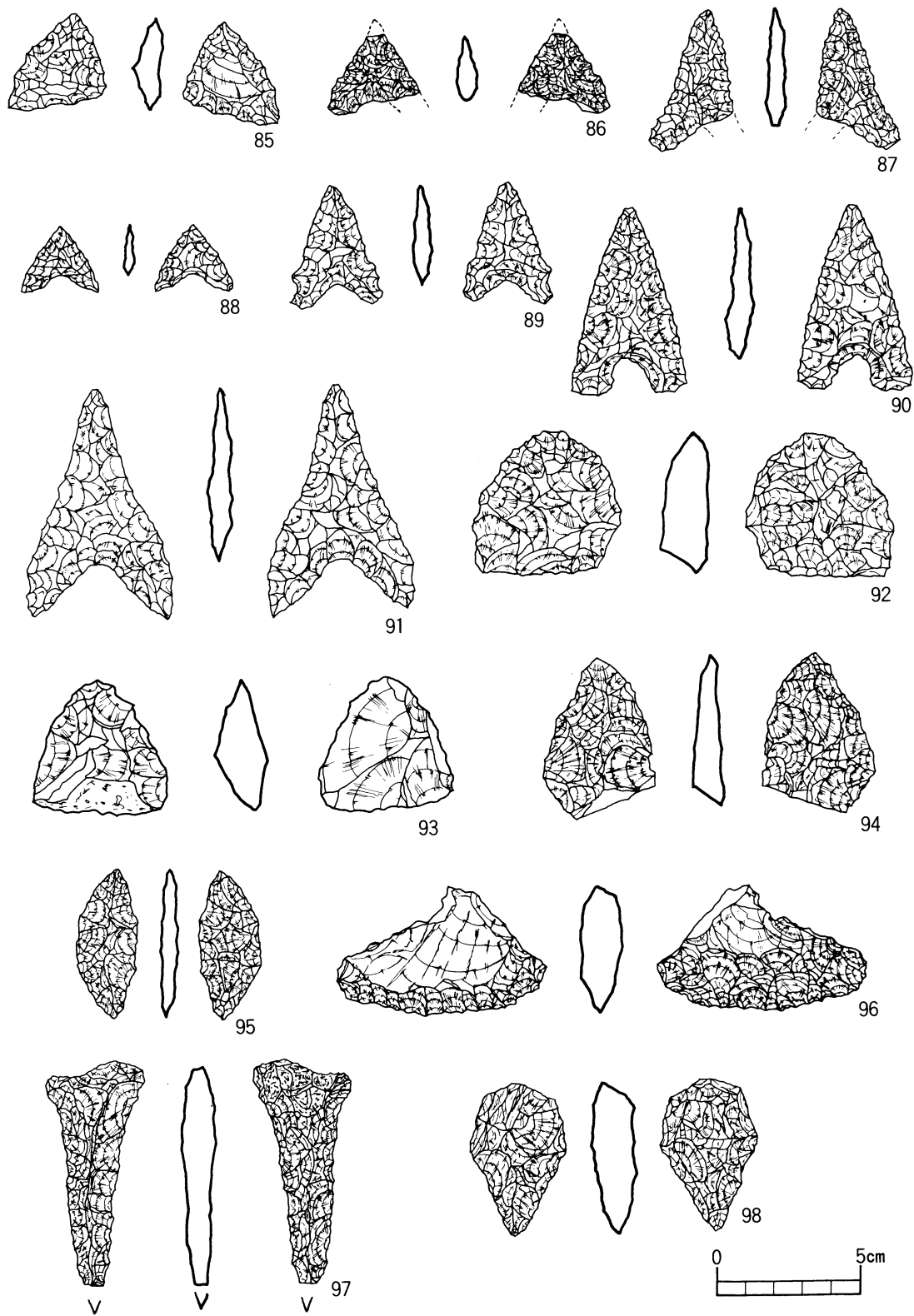
石英：A 長石：B 角閃石：C

挿図	遺物番号	出土区	層	外面色調	内面色調	焼成	胎土	外面調整	内面調整	備考	
第7図	1	A-3・4	Ⅳ	(暗)茶褐色	(暗)茶褐色	良好	A・B・C	粗いナデ	粗いナデ	補修孔あり	
第8図	2	C・D-3	Ⅳ	明茶褐色	明茶褐色	良好	A・B・C	丁寧なナデ	丁寧なナデ		
第9図	3	B-6	Ⅲ	黒茶褐色	茶褐色	良好	A・B・C	ヘラミガキ	ナデ	煤が付着・内面は剥落が著しい	
	4	B-1	Ⅱ _下	明褐色	明褐色	良好	A・B・C	ナデ	ナデ	煤が付着	
	5	B-2	Ⅲ	明黄褐色	明黄褐色	良好	A・B・C	ナデ・ヘラミガキ	ナデ	煤が付着	
	6	B-5	Ⅱ _下	暗茶褐色	茶褐色	良好	A・B・C	ナデ	ヘラミガキ	煤が付着	
	7	A-5	Ⅲ	茶褐色	明茶褐色	良好	A・B・C	ナデ	ヘラミガキ	煤が付着	
	8	A-6	I d	明褐色	明褐色	良好	A・B・C	ナデ	ナデ	煤が付着	
	9	B-1	Ⅲ	淡茶褐色	淡褐色	良好	A・B・C	ナデ	ナデ	煤が付着	
	10	B-1	Ⅲ	明褐色	明黄褐色	良好	A・B・C	ナデ	ナデ	煤が付着	
	11	A-3	Ⅱ _下	明灰褐色	明褐色	良好	A・B・C	ナデ	ナデ	煤が付着	
	12	B-2	Ⅲ	暗黄褐色	暗褐色	良好	A・B・C	ナデ	ナデ	煤が付着	
	13	B-6	I d	暗褐色	赤茶褐色	良好	A・B・C	ナデ	ナデ	孔列土器	
	14	A-5	Ⅲ	赤茶褐色	赤茶褐色	良好	A・B・C	ナデ	不明	孔列土器	
	第10図	15	B-5	Ⅲ	明茶褐色	茶褐色	良好	A・B・C	ナデ	ナデ	孔列土器
		16	A-5	Ⅲ	暗茶褐色	灰黒茶褐色	良好	A・B・C	ナデ	ナデ	煤が付着
17		A-1	Ⅱ _下	暗黄褐色	暗黄褐色	普通	A・B・C	ナデ?	不明	磨滅を受けている	
18		A-5	Ⅲ	明茶褐色	淡茶褐色	良好	A・B・C	ナデ・ヘラミガキ	ヘラミガキ	煤や指紋が付着	
19		B-5	Ⅱ _下	茶褐色	明黄褐色	良好	A・B・C	ナデ	ナデ後 ヘラミガキ	煤が付着	
20		B-5	Ⅲ	明茶褐色	淡茶褐色	良好	A・B・C	ナデ・ヘラミガキ	ヘラミガキ	煤や指紋が付着	
21		A-4	Ⅲ	暗茶褐色	茶褐色	良好	A・B・C	ナデ	ナデ	煤が付着	
22		A-5	Ⅲ	暗茶褐色	茶褐色	良好	A・B・C	ナデ	ヘラミガキ	煤が付着・木葉痕	
23		B-3	Ⅱ _下	明褐色	明褐色	良好	A・B・C	ヘラミガキ	ヘラミガキ	煤が付着	
24		A-2	Ⅲ	明黄褐色	明黄褐色	良好	A・B・C	ナデ・ヘラミガキ	ナデ	煤が付着	
第11図	25	B-4	I d	明褐色	明褐色	普通	A・B・C	ナデ?	ナデ	内部ともに部分的に剥落している	
	26	B-2	Ⅲ	明茶褐色	淡褐色	普通	A・B・C	ナデ	ナデ		
	27	A-1	Ⅱ _下	黒褐色	明褐色	良好	A・B・C	ナデ	ナデ後 ヘラミガキ	煤が付着	
	28	A-4	Ⅲ	暗褐色	褐色	良好	A・B・C	ナデ	ナデ	煤が付着	
	29	A-1	Ⅲ	暗灰褐色	明褐色	良好	A・B・C	ナデ	ナデ	煤が付着	
第12図	30	A-1	Ⅲ	明黄褐色	明黄褐色	良好	A・B・C	ナデ	ナデ	煤が付着	
第11図	31	B-1	Ⅲ	黒褐色	茶褐色	良好	A・B・C	ナデ	ナデ	煤が付着	
	32	A-1	Ⅲ	明茶褐色	暗褐色	良好	A・B・C	ナデ	ナデ	煤が付着	
	33	A-6	Ⅱ _下	明黄茶褐色	灰褐色	良好	A・B・C	ナデ	ナデ		

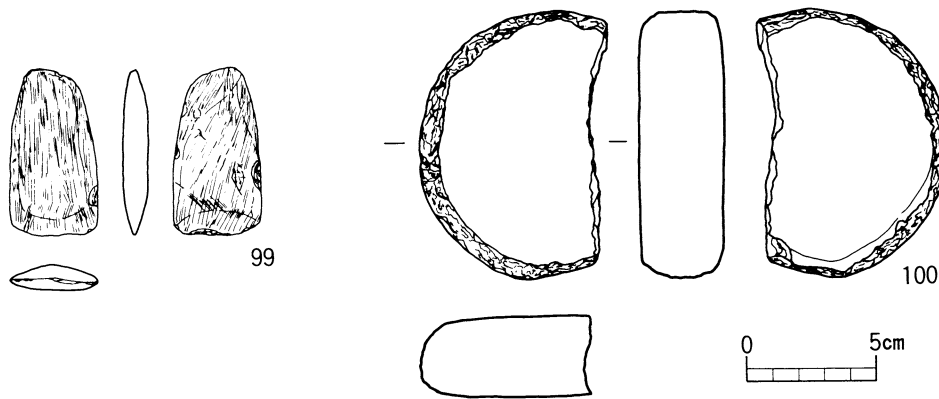
挿図	遺物番号	出土区	層	外面色調	内面色調	焼成	胎土	外面調整	内面調整	備考
第	34	A-5	Ⅲ	茶褐色	灰黒褐色	良好	A・B・C	ナ デ	ナ デ	
	35	B-1	Ⅲ	明茶褐色	明茶褐色	良好	A・B・C	ナ デ ?	ナ デ ?	磨滅を受けている
	36	B-4	Ⅲ	明褐色	明褐色	良好	A・B・C	不 明	不 明	磨滅を受けている
	37	A-2	Ⅲ	明茶褐色	暗褐色	良好	A・B・C	ナ デ	ナ デ	煤が付着
	38	A-1 B-5	Ⅱ _下 Ⅲ	暗褐色	赤茶褐色	良好	A・B・C	ナ デ	ナ デ	煤が付着
	39	A-1	Ⅱ _下	明褐色	明黄褐色	良好	A・B・C	ナ デ	ナ デ	煤が付着
	40	B-4	Ⅱ _下	淡茶褐色	明茶褐色	良好	A・B・C	ナ デ	ナ デ	煤が付着
	41	A-1	Ⅲ	灰黒褐色	明褐色	良好	A・B・C	ナ デ	ナ デ	煤が付着
	42	B-2	Ⅲ	黒褐色	明褐色	良好	A・B・C	ナ デ	ナ デ	煤が付着
	43	B-6	Ⅱ _下	灰黒褐色	明黄褐色	良好	A・B・C	ハラミガキ	ハラミガキ	煤が付着
	44	B-1	Ⅲ	灰黒褐色	明褐色	普通	A・B・C	ナ デ	ナ デ	煤が付着
第	45	A-5	Ⅱ _下	明茶褐色	明茶褐色	良好	A・B・C	ナ デ	ハラミガキ ナ デ	
	46	B-2	Ⅱ _下	明茶褐色	褐色	良好	A・B・C	ナ デ	ナ デ	
	47	B-4	I d	明茶褐色	明茶褐色	良好	A・B・C	ナ デ	ナ デ	
	48	A-5	Ⅱ _下	明茶褐色	明褐色	良好	A・B・C	ナ デ	ハラミガキ	
	49	B-4	I d	明赤茶褐色	明茶褐色	良好	A・B・C	ナ デ	ハラミガキ	
	50	A-2	Ⅲ	明褐色	明褐色	良好	A・B・C	ハラミガキ	ナ デ ハラミガキ	
	51	A-2	Ⅲ	明茶褐色	明灰褐色	良好	A・B・C	ハラミガキ	ハラミガキ	
	52	A-4	Ⅱ _下	明灰褐色	明灰褐色	普通	A・B・C	ハラミガキ	不 明	部分的に剥落している
	53	A-5	Ⅱ _下	灰黒茶褐色	灰褐色	普通	A・B・C	ナ デ	ナ デ ?	部分的に剥落している
	54	A-2	Ⅱ _下	明灰黒褐色	明黄褐色	良好	A・B・C	ナ デ	ナ デ	
	55	B-1	Ⅲ	黄茶褐色	暗茶褐色	良好	A・B・C	ナ デ	ナ デ	煤が付着
第	56	B-2	Ⅲ	明茶褐色	明茶褐色	良好	A・B・C	ハラミガキ	ハラミガキ	布目圧痕
	57	A-5	Ⅲ	茶褐色	黒茶褐色	良好	A・B・C	ナ デ	ハラミガキ	
	58	A-5	Ⅲ	茶褐色	黒茶褐色	良好	A・B・C	ナ デ	ハラミガキ	
	59	B-5	Ⅱ _下	明黄褐色	明黄褐色	良好	A・B・C	ナ デ	ハラミガキ	
	60	A-4	Ⅱ _下	灰黒褐色	明褐色	良好	A・B・C	ナ デ	ハラミガキ	
	61	A-5	Ⅲ	明茶褐色	明褐色	良好	A・B・C	ナ デ	ナ デ	煤が付着
	62	B-1	Ⅲ	明茶褐色	明黄褐色	良好	A・B・C	ナ デ	ナ デ	
	63	A-5	Ⅲ	明黄褐色	明黄褐色	良好	A・B・C	ハラミガキ	ハラミガキ	木葉痕
	64	A-1	Ⅲ	赤茶褐色	灰黒茶褐色	良好	A・B・C	ナ デ	ナ デ	
	65	A-1	Ⅱ _下	黒褐色	明黄褐色	良好	A・B・C	ナ デ	ナ デ	煤が付着



第14图 出土石器实测图(1)



第15图 出土石器实测图(2)



第16図 出土石器実測図 (3)

痕を残し、刃部付近に細かく調整剥離を加え、もう片面は全体的に大小の調整剥離が施され、刃部を作り出している。

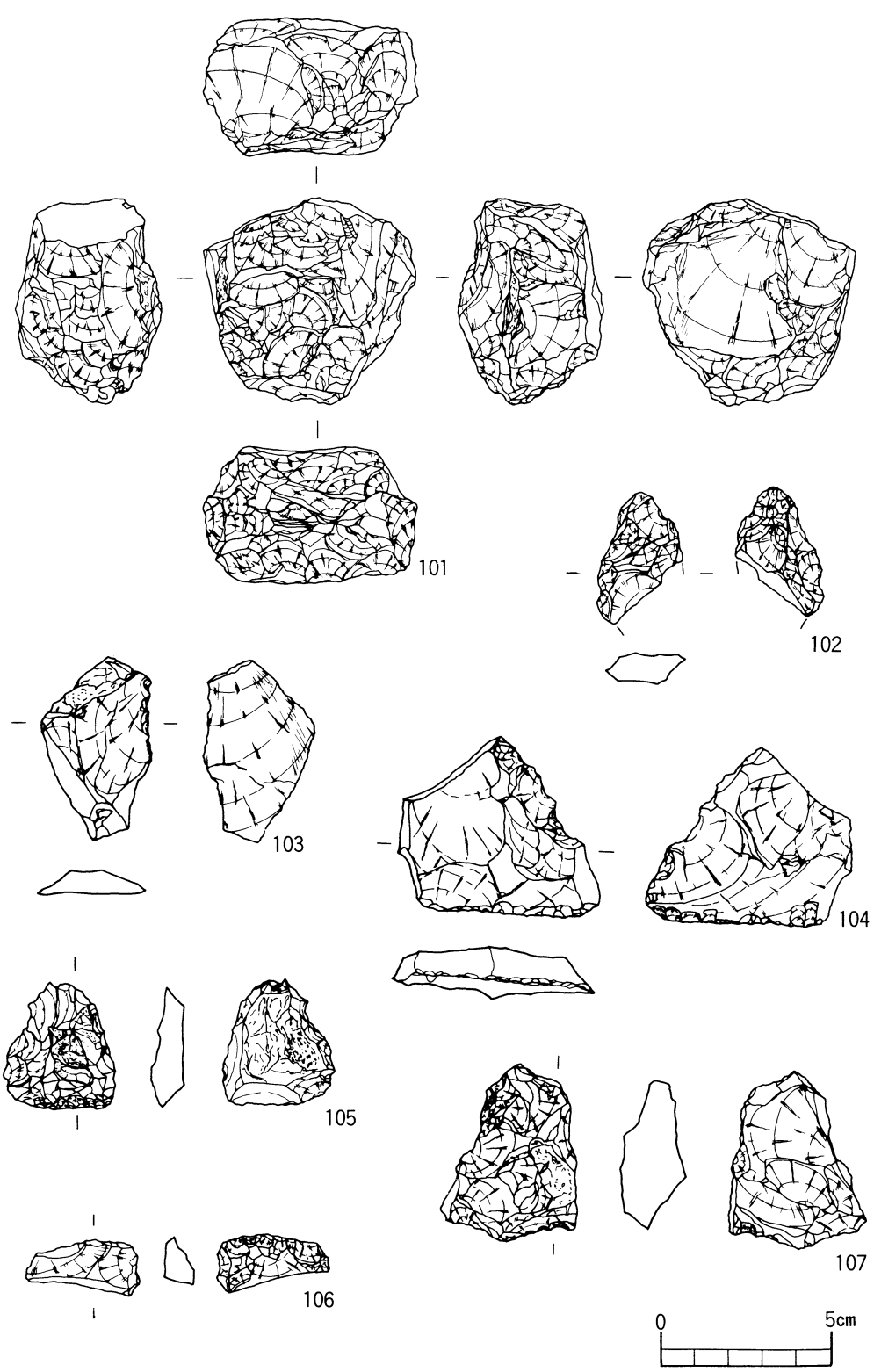
97, 98は石錐で、97は全体的に丁寧な調整剥離が施され、基部の一部に自然面を残した細長の形状で、先端部は断面三角形を呈し使用のためか僅かに欠損している。98は大小の調整剥離が施され、先端部は使用のためか若干欠損しているようである。

95は異形石器として取り扱った。この資料は柳葉形の形状で、剥片を素材として両側縁に両面より調整剥離が施され、用途は不明である。

99は扁平で小型の磨製石斧である。基部の形態は丸味をもち、その膨らみから胴部側辺との境は不明であり、胴部の形態は胴部上半より胴部下半が若干大きく、刃部の形態は刃部中心部が直線的で両端が丸味を帯びている。刃部の片側のみ使用のためか刃こぼれが観察され、器面全体に擦痕が観察される。

100は磨石兼敲石の機能をもつ資料で、約半分近くを欠損するが、楕円形の形状を呈するものである。使用痕についてみると、両面は稜線が判明するほど磨り減った状態で、その他の使用として側縁周には敲打痕が認められる。この状況から磨石自体の主目的である機能か、敲石としての作業を兼ね備えたのか不明である。

このほか、石核 (101)、石槍 (102)、剥片石器 (103, 105~107)、スクレイパー (104) である。101は節理面のある素材を利用し、ほぼ全面に剥離面を残し、上下左右の側面は表裏両面から剥いており、表面の広い面は上下両面から剥離を行なっている。104は大きい剥離面を残した素材を用い、片側側縁を欠損しているが、下面に両側より調整剥離が施され刃部を作り出している。102は約半分を欠損しているが、両面に粗い剥離調整が施されている。103, 105~107は不定形の剥片を素材としたもので、粗い剥離調整が施され、側縁の一部に刃部をもつもので、ここでは一括して剥片石器として取り上げた。



第17图 出土石器实测图(4)

第3表 石器観察表

群別番号	遺物番号	出土区	層	器種	最大長 cm	最大幅 cm	最大厚 cm	重量 g	石材	備考
第14	66	表採		打製石鏃	1.4	1.6	0.3	0.4	頁岩	基部が若干凹む
	67	A-6	Ⅱ下	〃	1.5	1.5	0.3	0.4	頁岩	
	68	B-3	Ⅱ下	〃	1.2	1.4	0.3	0.4	蛋白石	
	69	A-3	Ⅲ	〃	(1.3)	(1.3)	0.3	0.3	蛋白石	基部片側が若干欠損
	70	B-5	Ⅱ下	〃	(1.3)	1.6	(0.3)	0.9	蛋白石	先端部が欠損
	71	表採		〃	2.0	1.6	0.6	1.9	蛋白石	
	72	B-2	Ⅲ	〃	2.2	1.7	0.5	1.3	蛋白石	基部が若干凹む
	73	B-4	Ⅲ	〃	(1.1)	1.4	(0.3)	0.4	蛋白石	先端部が欠損, 基部が若干凹む
	74	A-3	Ⅱ下	〃	1.3	1.4	0.3	0.4	蛋白石	基部が若干凹む
	75	B-3	Ⅲ	〃	(0.9)	(1.4)	(0.3)	0.3	蛋白石	先端部の大半が欠損, 基部が若干凹む
	76	A-4	Ⅱ下	〃	1.5	1.5	(0.6)	1.0	蛋白石	基部が若干凹む
	77	B-6	Ⅲ	〃	(1.4)	(1.3)	0.3	0.4	蛋白石	基部片側及び先端部が若干欠損 基部が若干凹む
	78	A-4	Ⅲ	〃	(1.5)	2.2	(0.6)	1.0	安山岩	先端部が欠損
	第15	79	B-2	I d	〃	(2.1)	(1.4)	(0.5)	1.6	蛋白石
80		B-5	Ⅲ	〃	(1.2)	1.4	0.3	0.4	蛋白石	基部が若干凹む, 先端部が欠損
81		A-4	Ⅱ下	〃	(1.0)	(1.5)	(0.4)	0.4	蛋白石	基部の一部と片側のみで大半が欠損
82		A-6	Ⅱ下	〃	1.7	1.4	0.4	0.7	蛋白石	基部が若干凹む
83		A-1	Ⅱ下	〃	3.4	2.9	0.5	3.3	蛋白石	片側部が欠損, 基部が若干凹む
84		A-4	Ⅲ	〃	2.2	2.1	0.4	0.9	蛋白石	基部が若干凹む
85		B-1	I d	〃	1.6	1.5	0.5	0.8	蛋白石	略三角形の形状を呈す
86		A-5	Ⅲ	〃	1.3	(1.5)	0.4	0.5	チャート	先端部及び片側が欠損 基部が凹む
87		A-6	Ⅲ	〃	(2.3)	(1.4)	(0.4)	0.8	蛋白石	片側が欠損, 基部がV字状に凹む
88		表採		〃	1.0	1.3	0.2	0.1	黒曜石	基部がV字状に凹む
89		A-5	Ⅲ	〃	2.0	1.4	0.4	0.9	蛋白石	基部がV字状に凹む
90		A-2	I d	〃	3.0	1.8	0.5	1.7	チャート	基部がU字状に凹む
91		A-4	I d	〃	3.8	2.3	0.4	2.0	シルト岩	基部大きく凹む (V字状?)
92		A-6	Ⅱ下	〃	2.3	2.3	0.7	3.8	蛋白石	未製品か
93	A-4	Ⅲ	〃	2.1	2.1	0.9	3.5	蛋白石	未製品	
94	B-4	I d	〃	2.6	1.8	0.6	1.9	蛋白石	未製品	
95	A-4	Ⅲ	異形石器	2.4	1.0	0.3	0.6	蛋白石	柳葉形の形状を呈す	
96	A-5	I d	石匙	(2.1)	(3.3)	0.7	4.2	頁岩	つまみ部が欠損	
97	A-4	I d	石錐	3.6	1.5	0.6	2.1	頁岩	先端部が欠損	
98	A-3	Ⅲ	石錐	2.4	1.5	0.7	2.4	蛋白石		
第16	99	B-3	Ⅱ下	磨製石斧	6.5	3.4	1.0	22.9	砂岩	
第17	100	A-5	Ⅲ	磨石兼敲石	10.4	(7.4)	3.4	372.0	安山岩	
第17	101	A-2	Ⅲ	石核	6.7	6.2	4.4	192.0	蛋白石	
	102	A-6	Ⅱ下	石槍	(3.9)	(2.6)	(1.1)	7.9	蛋白石	
	103	B-6	Ⅱ下	剥片石器	(5.5)	3.4	0.9	14.4	蛋白石	
	104	B-6	Ⅲ	スクレイパー	(6.6)	5.3	(1.6)	37.8	蛋白石	
	105	A-2	I d	剥片石器	3.9	3.4	1.0	13.3	蛋白石	
	106	B-4	Ⅲ	剥片石器	(3.4)	(1.8)	(1.0)	4.8	蛋白石	
	107	A-3	I d	剥片石器	5.4	4.1	2.0	42	蛋白石	

第V章 歴史時代

第1節 遺構

概要 (第18図)

遺構はⅢ層掘り下げ完了後検出できた。遺構埋土内からは土師器片が出土したので、本章で扱う。アカホヤ火山灰層より上層のⅢ層は縄文時代晩期相当の土層であり、この面では土師器相当の遺構が検出できなかったのは後世の耕作等によって削平を受け、Ⅱ層が残存不良であったためであり、遺構そのものの残りも不良である。

遺構には掘立柱建物2棟のほか土坑、溝状遺構、古道、ピット、焼土がある。以下、掘立柱建物・溝状遺構・古道について詳細を報告する。

検出遺構

1. 掘立柱建物 (第19図)

1号掘立柱建物 A-3区で検出された3×2間のもので、主軸方向はほぼ北～南である。P₆は溝状遺構によって削平を受け、P₇は古道が乗っていた。桁行は西側が約4.64m (柱間P₁-P₂→1.42m, P₂-P₃→1.82m, P₃-P₄→1.64m), 東側が約4.98m (柱間P₆-P₇→1.52m, P₇-P₈→1.76m, P₈-P₉→1.70m) である。梁行は南北ともに約3.20m (南側柱間P₄-P₅→1.62m, P₅-P₆→1.58m, 北側柱間P₉-P₁₀→1.72m, P₁₀-P₁→1.51m) である。柱穴は径34~52cm, 深さ16~27cmを残す。P₇が楕円形であるが、ほかはほぼ円形の平面形である。柱穴の埋土内からは砥石、土師器、把手などが出土した。

2号掘立柱建物 B-2区で検出された2×1間のもので、主軸方向はほぼ北～南である。桁行は西側が約2.75m (柱間P₁-P₂→1.51m, P₂-P₃→1.25m), 東側が約3.10m (柱間P₄-P₅→1.81m, P₅-P₆→1.38m) である。梁行は南側が1.74m, 北側が1.67mである。柱穴は径21~30cm, 深さ11.9~32.6cmを残し、平面形はほぼ円形である。柱穴の埋土からは土師器片が出土した。

1号、2号とも柱穴には柱痕跡は認められなかった。

2. 溝状遺構

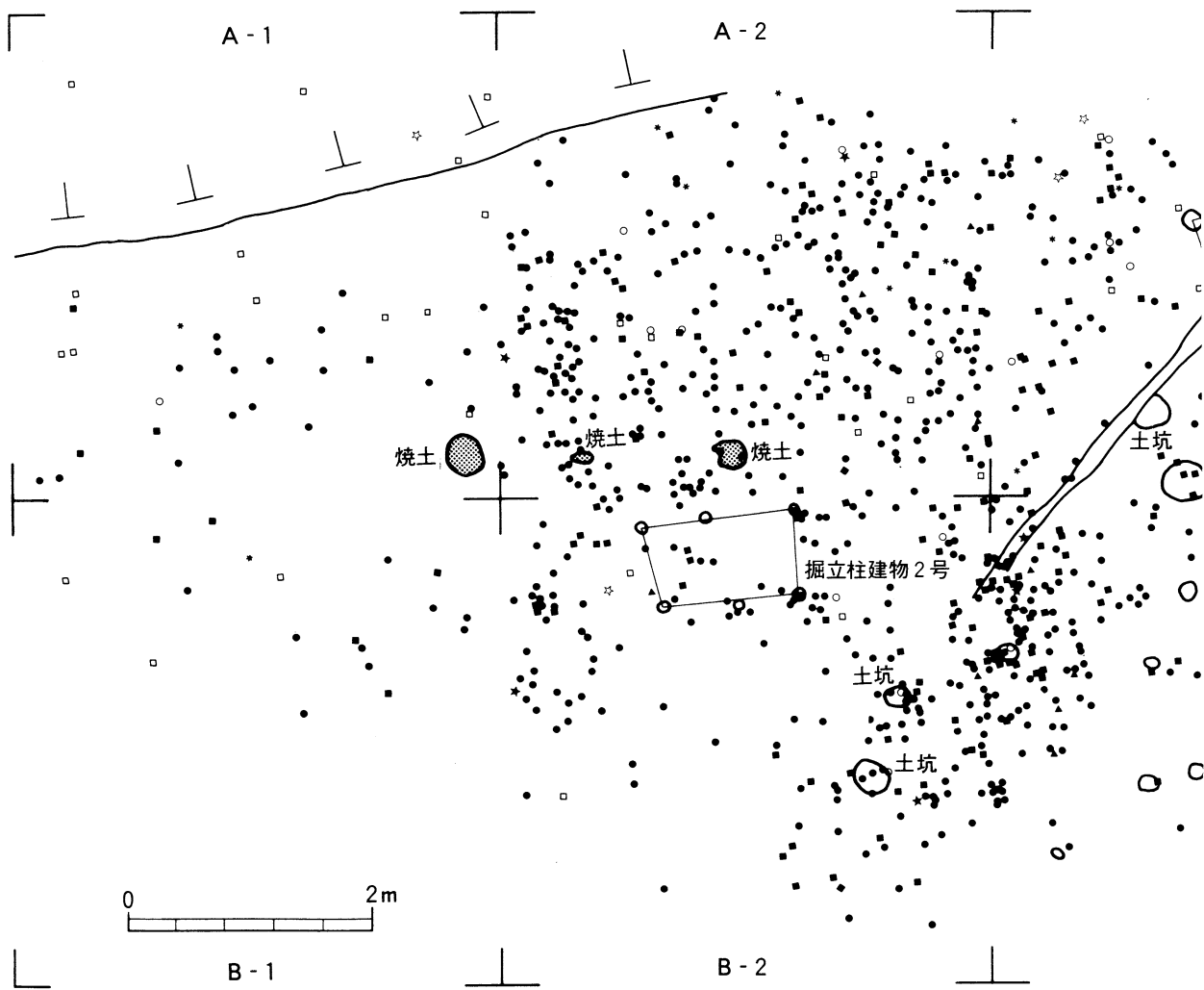
溝状遺跡は3条検出された。

A・B-4区では東～西方向に長さ5.80m, 幅33~58cm, 深さ4.4~16.1cmを残して検出された。西から東に向かって流れる。埋土は黒色土に炭化物を含んでいた。

A-3区では壁面付近に調査区域外に向かって東西方向に2本検出された。調査区域の関係から1.6m程しか検出できなかったが、幅67cm, 深さ10cm程を残す。この2条の間に古道がありB-2区の方に伸びている。

3. 古道

A-3区からB-2区にかけて、北西～南東方向に古道が検出された。固く締められた路面を長さ約12m, 幅33~42cm残す。一部1号掘立柱建物の柱穴を覆っている。



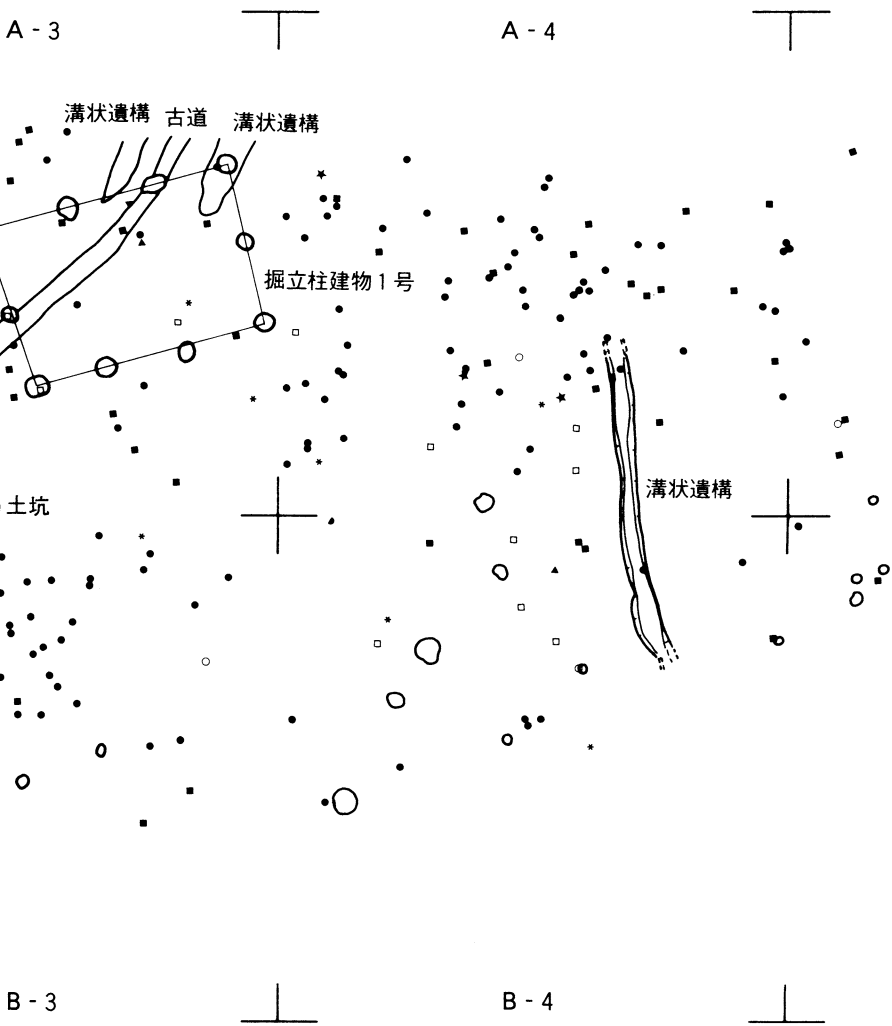
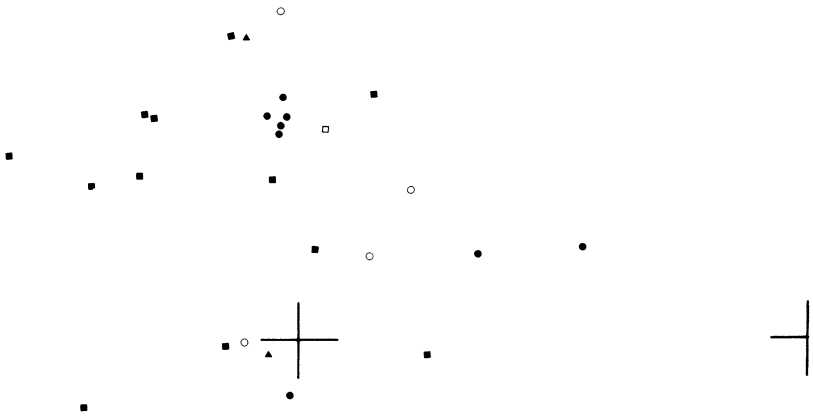


図 歴史時代遺構配置図及び出土遺物分布図 (1/150)

A - 5



A - 6



- 凡例
- 土師甕
 - ▲ 黑色土器A類
 - 土師器 (供膳用形態)
 - 須惠器
 - * 鉄滓
 - 陶磁器
 - ☆ 摺鉢

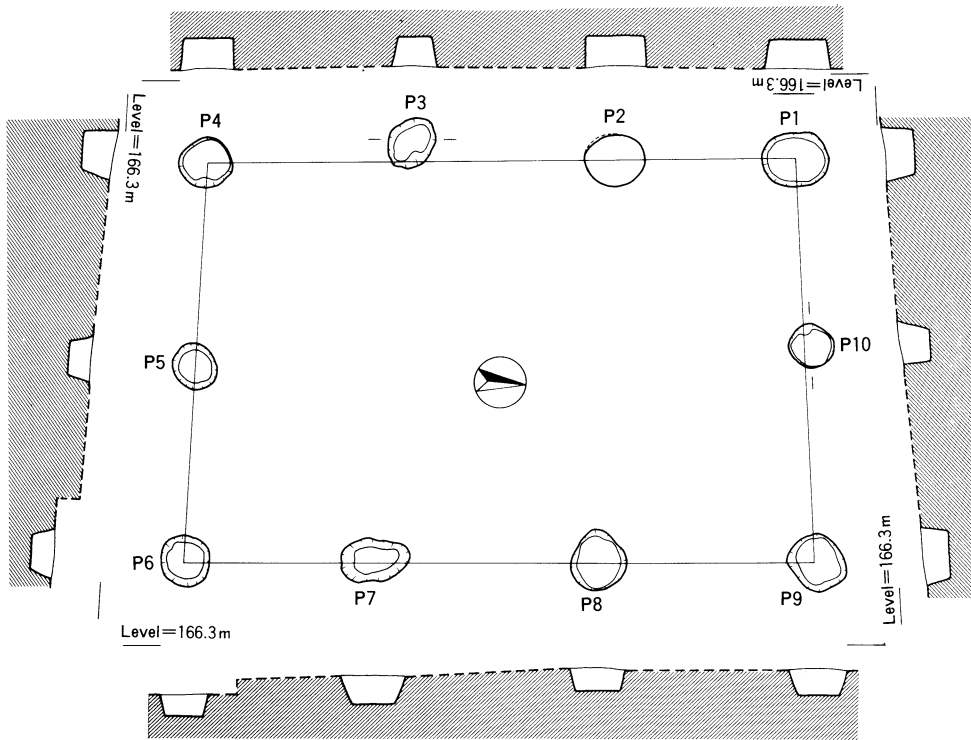


B - 5

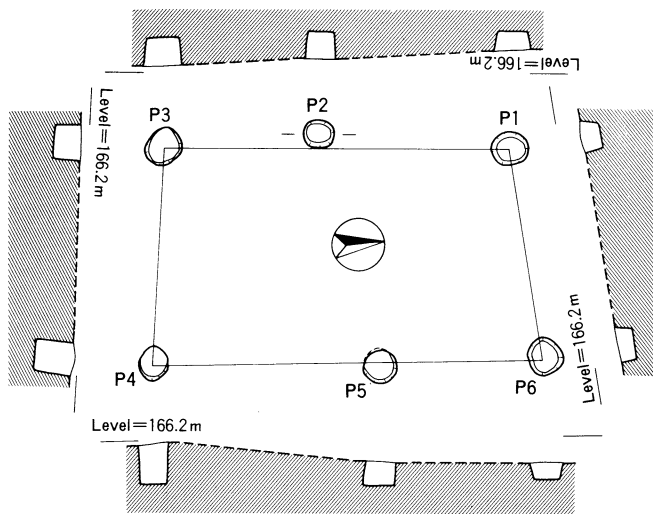


B - 6

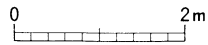




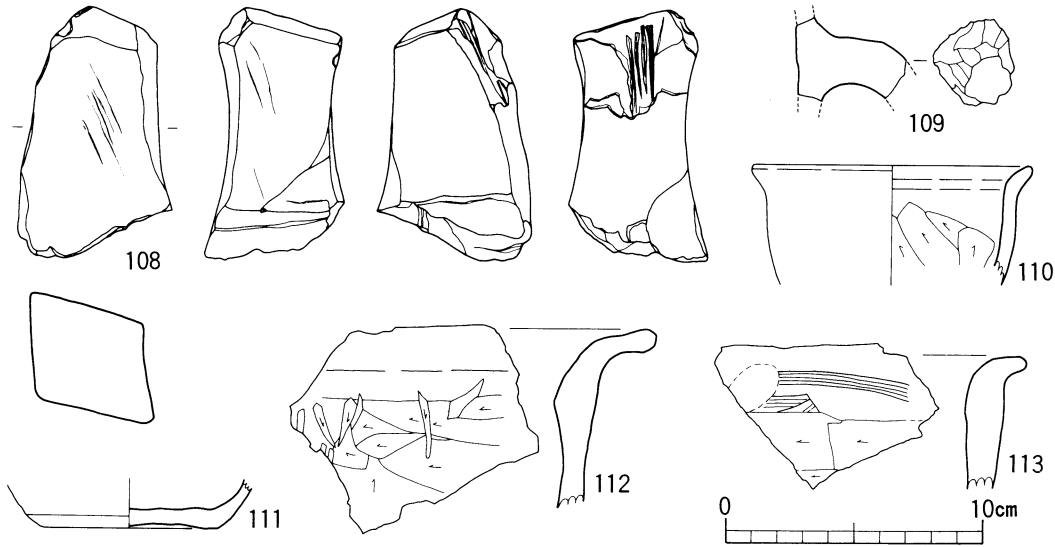
1号掘立柱建物



2号掘立柱建物



第19图 掘立柱建物实测图 (1/60)



第20図 遺構内出土遺物実測図 (1/3)

遺構内出土遺物 (第20図 108~113)

108~110は掘立柱建物1号の柱穴から出土したものである。107はP₃から出土した砥石である。長方形の四面をすべて利用している。109はP₁から出土した把手である。ナデによって調整し、上半は赤褐色、下半は黒褐色を呈する。胎土には軽石・石英他砂粒を含む。110はP₁₀から出土した甕である。内面はヘラケズリ、口縁及び外面はナデによって調整を施す。胎土には石英・角閃石を含み、黒褐色・茶褐色を呈する。

111はA-3区の土壌から出土した土師器杯の底部である。回転ヘラ切りで、体部下端にケズリ状の痕跡が残る。胎土には石英を含み、茶褐色を呈する。

112はB-4区のピットから出土した甕である。内面にやや無作為な感のあるヘラケズリが施される。胎土には石英・金雲母・砂粒を含み、暗茶褐色・茶褐色を呈する。113はB-3区のピットから出土した甕である。口縁内部に刷毛目調整が施され、指紋が残る。胎土には石英・長石・角閃石・砂粒を含み、茶褐色を呈する。

第2節 出土遺物

概要 (第18図)

Ⅱ層及びⅢ層上部から出土した遺物には土師器・黒色土器A類・須恵器・紡錘車・瓦器などがある。また、Ⅰb層から白磁・青磁などが出土している。完形品はなく実測は復元によるものである。

出土遺物

1 土師器

(第21図 114~127・第22図 128~136・第23図 149~155・第24図 156~161)

土師器には杯・椀・皿・小皿・甕・壺がある。杯・椀・皿・小皿といった供膳用形態には調整にケズリを施すものとそうでないものがある。また火熱を受けた跡の残るものが多い。糸切り底は小皿にのみみられた。

114~117は外面調整にケズリが施されているものである。

114は体部外面下端に回転ヘラケズリが施され、また底部外面は丁寧なヘラケズリによって調整される。体部は直線的に開き、口縁部はやや鋭い。胎土には石英・長石他砂粒を多く含み茶褐色を呈する。115も体部外面下端に回転ヘラケズリを施す。また、体部外面中央にU字状のくぼみ3条を残している。わずかに内湾しながら開く体部である。断面観察によると、焼成後に再度火を受けている様子が窺える。胎土には石英を含み淡黄茶褐色・乳茶褐色を呈する。116は皿でやはり体部外面下端に回転ヘラケズリが施される。内湾する体部である。胎土には石英を含み、茶褐色を呈するが、熱を受けやや赤茶けている。117も体部外面下端のケズリであるがその調整法は、①器体をひっくりかえす②体部中央から底部にむけて段々と、細かいケズリを断続的に施し③この上に回転ヘラケズリを施すものである。体部は内湾する。胎土には石英や砂粒を少々含み、茶褐色を呈するが、口縁付近は熱を受け赤茶けている。

118~121は杯である。体部外面に余り稜をもたない。

118は直線的に開く体部をもつ。胎土には砂粒を含み、茶褐色を呈する。火熱を受けている。119は口縁付近でやや外傾する。底部はヘラ切りで未調整である。胎土には石英の他砂粒を少々含み、茶褐色を呈する。120は内湾気味の体部で口縁付近でやや外傾する。石英を含み、茶褐色を呈する。121はわずかに内湾する体部をもつ。石英や砂粒を含み、淡茶褐色を呈する。

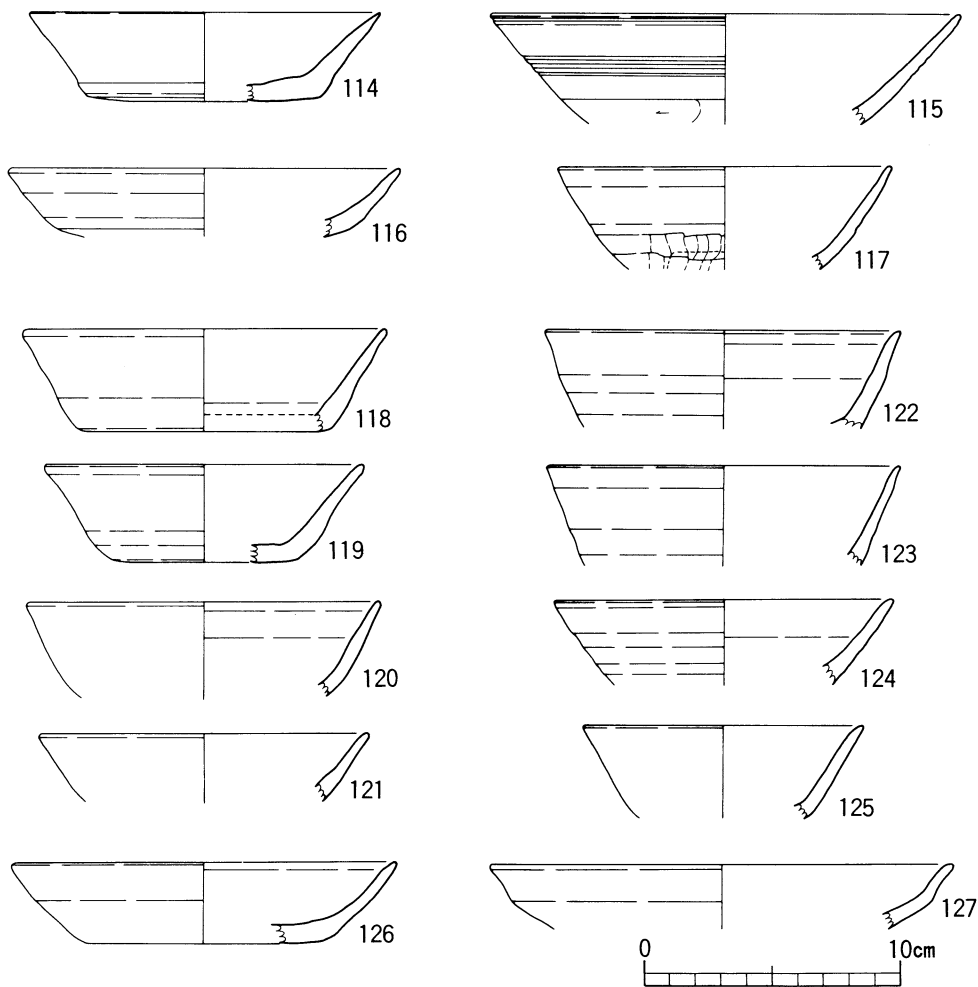
122~124は底部は存在しないが、椀であると思われる。稜を多く残す。122はおそらく高台が付くものである。わずかに内湾する体部をもつ。胎土には石英・角閃石・長石や砂粒を少々含み、赤茶褐色を呈する。123は直線的に開く体部をもつ。胎土には砂粒を少々含み、淡茶褐色を呈する。火熱を受けている。124は体部がわずかに内湾する。胎土には石英の細粒を含み淡茶褐色を呈する。

125は杯であるが、調整不明である。直線的に開く体部をもつ。胎土には石英や砂粒を含み茶褐色を呈する。火熱を受けている。

126・127は皿である。

126はわずかに内湾する体部をもち、底部はナデ調整が施される。胎土には石英細粒や砂粒を少々含み、茶褐色を呈する。外面は熱を受けている。127は体部中央で屈曲している。胎土には石英細粒を含み、茶褐色を呈する。外面に煤が付着している。

128~134は杯の底部である。133・134はわずかに残った体部の下端にヘラケズリが施されている。共に外面に熱を受けている。133の底部外面はヘラケズリによって調整される。

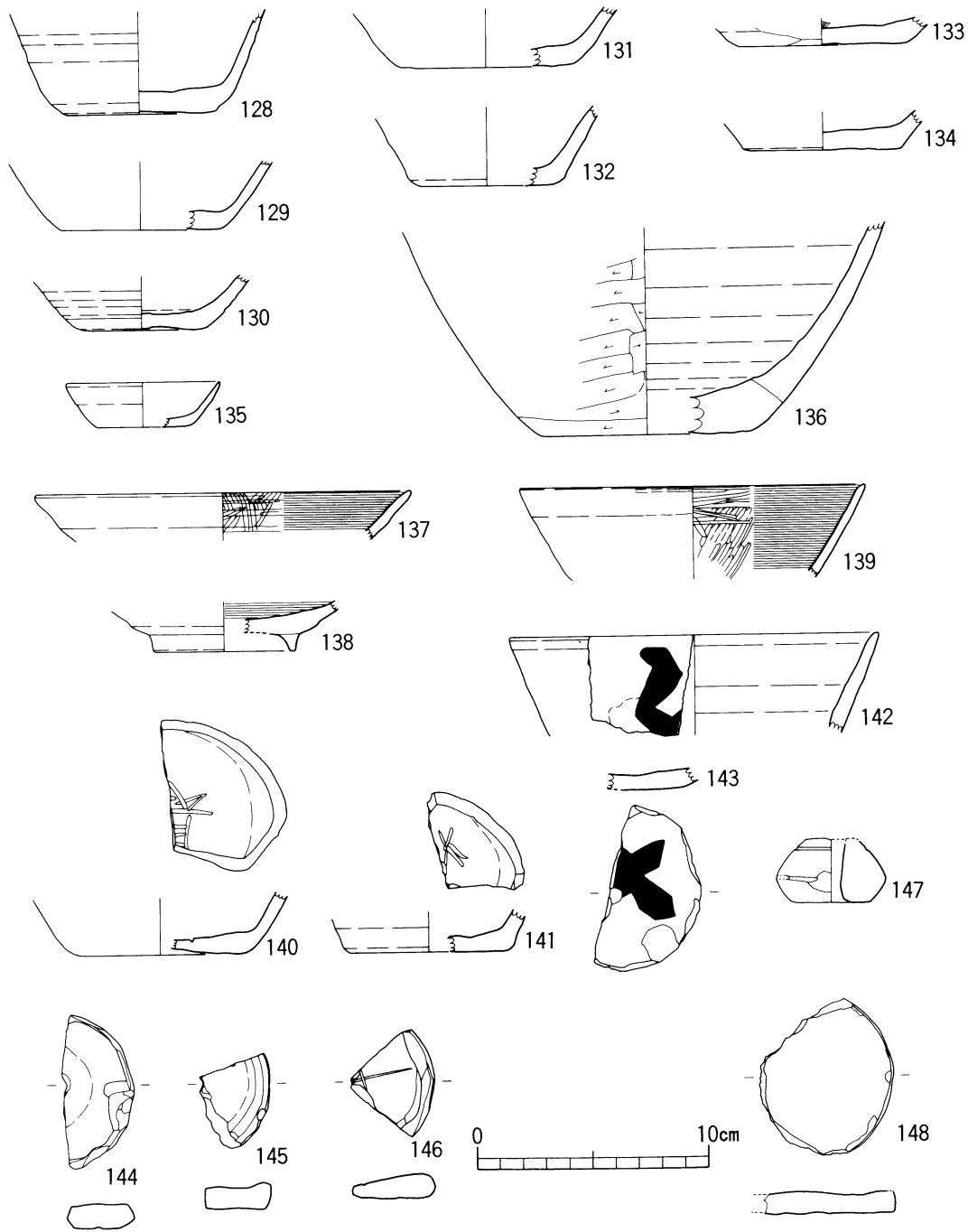


第21図 出土土器実測図(8) (1/3)

また、内面は刷毛目もなされる。胎土には砂粒を少々含み、赤茶褐色を呈する。134の底部は回転ヘラ切りである。胎土には砂粒を含み、淡茶褐色を呈する。128~132はヨコナデ調整によるものである。128~130回転ヘラ切りによる切り離しである。128は切り離した後、ナデている。また、繊維痕がみられる。胎土には石英・砂粒を含み、茶褐色を呈する。火熱を受けたためやや赤茶けており、煤も付着している。129は底部は未調整である。胎土には石英・砂粒を含み、淡黄茶褐色を呈する。130の底部は不十分なナデを施している。体部も稜を多く残す。胎土には砂粒を含み、淡い赤茶褐色を呈する。火熱を受けている。131・132は切り離しは明瞭でないがナデ調整を行っている。また、共に火熱を受けている。胎土には石英を含み淡茶褐色を呈する。132は胎土に石英を少々含み、茶褐色を呈する。

135は回転糸切り底の小皿である。切り離し後は未調整である。胎土には石英を含み茶褐色を呈する。

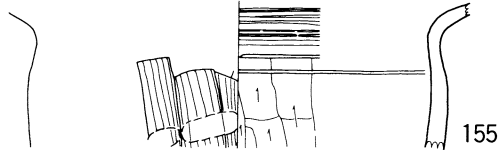
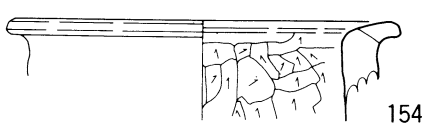
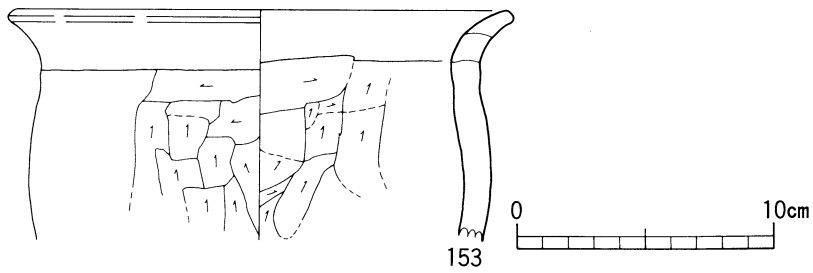
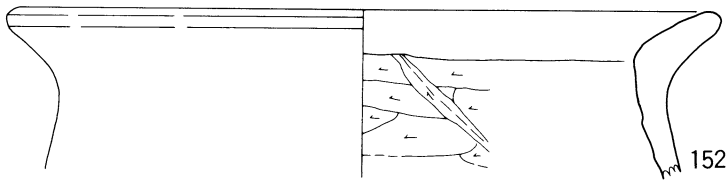
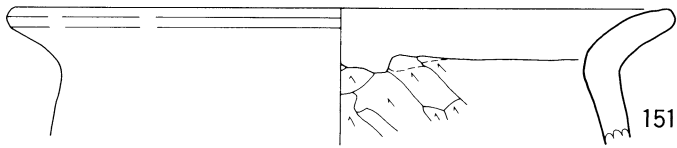
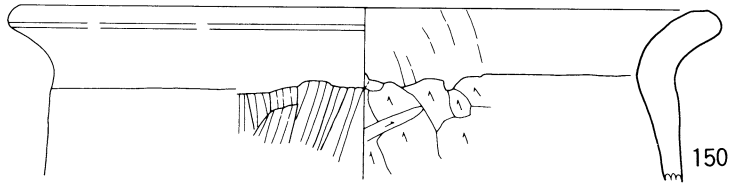
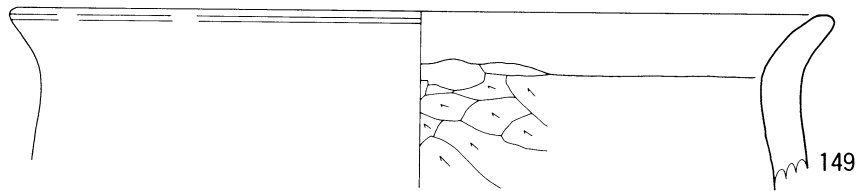
136は器種不明であるが、おそらく壺であると思われる。体部が、底部から緩やかに内湾しながら立ち上がっている。体部外面は横方向のヘラケズリが成され、内面はヨコナデである。



第22図 出土土器実測図(9) (1/3)

底部は内外面ともにナデによっている。胎土には長石・石英他砂粒を含み淡茶褐色を呈する。火熱を受けている。

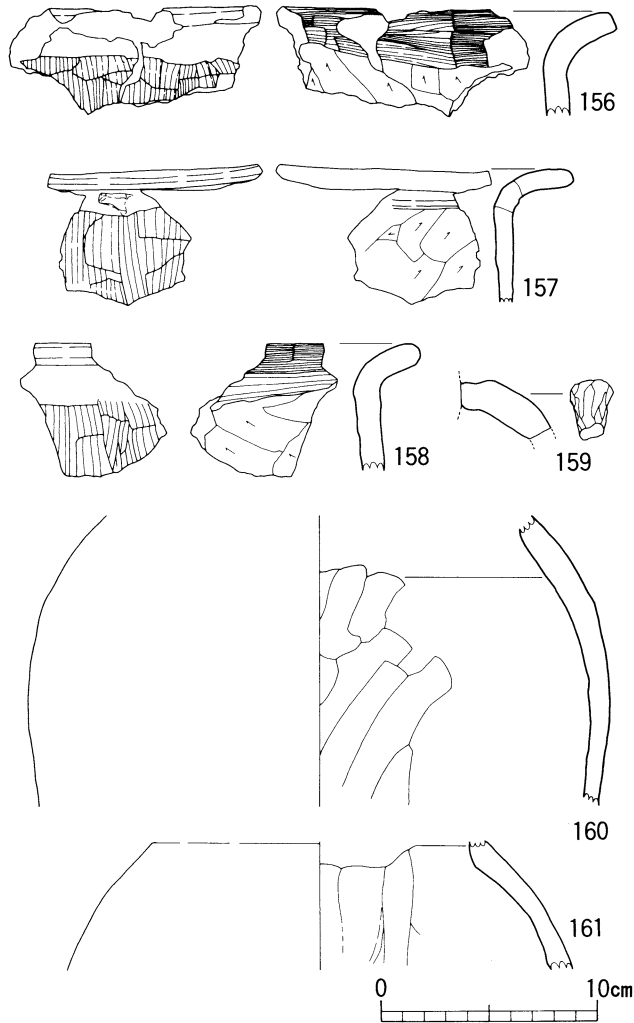
149~158は甕である。いずれも口縁で外反し、内面にヘラケズリが施されている。149・151・152・154はヨコナデによって外面調整を行っている。胎土には石英・角閃石・金雲母・砂粒な



第23図 出土土器実測図 (10) (1/3)

どが含まれる。150・155～158は刷毛目によって外面調整が施される。150は口縁内面にへらがあつた痕跡を残している。155は口縁内面に横方向の刷毛目が、体部に縦方向の刷毛目が施される。153は外面にも細かいへラケズリが施される。

159は甕につく把手である。欠損しているが、ナデによって調整している。胎土には石英・



第24図 出土土器実測図 (11) (1/3)

乳茶褐色を呈する。139はわずかに内湾しながら、まっすぐ開く体部である。内面のヘラミガキは上半が丁寧に施してあるのに対し、下半はやや荒い。胎土には石英を含み、外面は茶褐色・暗灰褐色を呈する。

3. 刻書土師器 (第22図 140・141)

140・141は土師器杯の内底面に刻書のあるものである。140は幅1.5mm程度の線で、断面は鋭角的である。「長」の字であると思われる。なお、外底面はヘラ切り未調整である。141は字は不明で、外底面にナデ調整を施行している。

砂粒を含み、茶褐色を呈する。

160・161はの壺の胴部であると思われる。外面と内面上部はナデによって調整する。内面はその他はヘラケズリである。胎土には石英・金雲母・砂粒を含み、淡茶褐色を呈する。

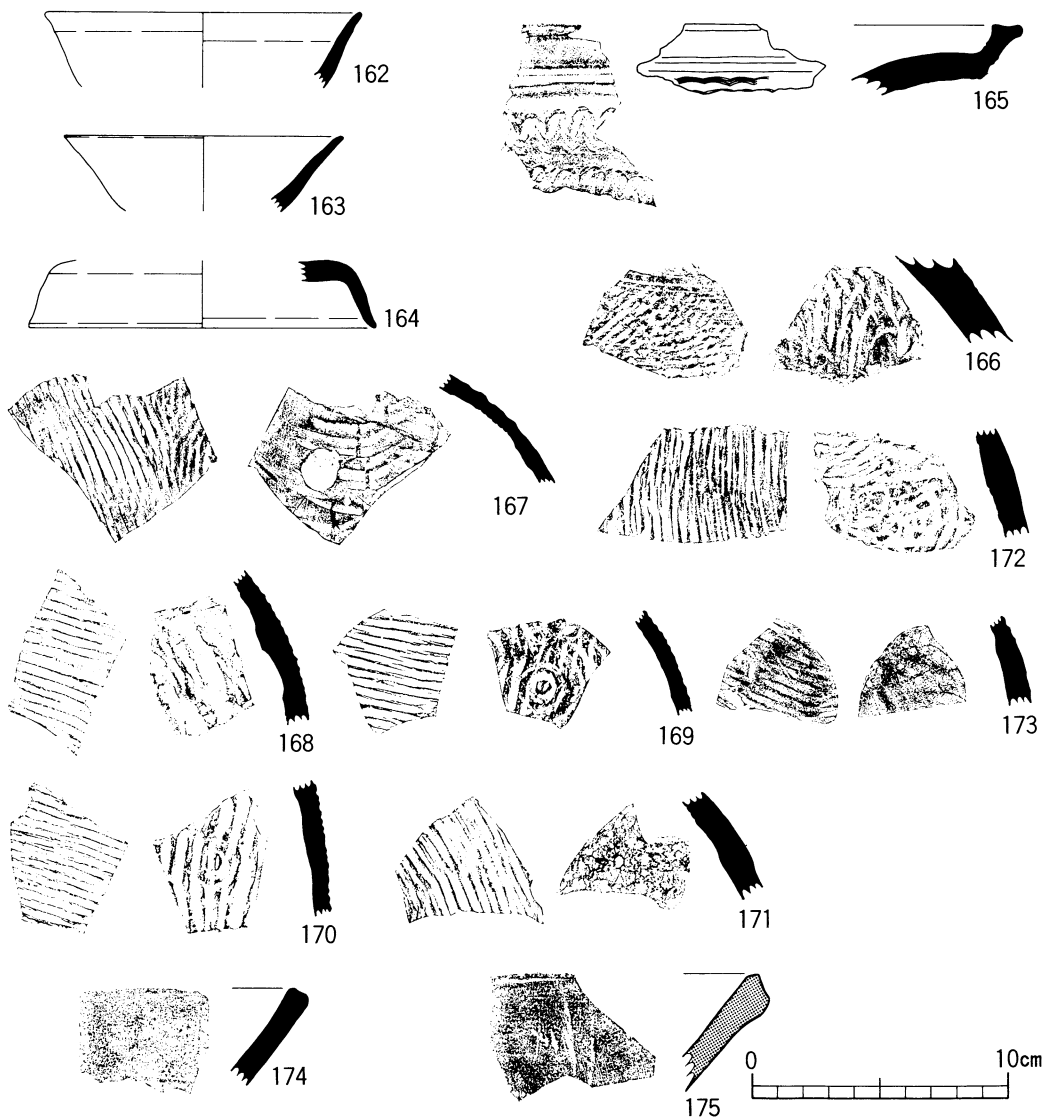
2. 黒色土器A類

(第22図 137~139)

黒色土器は内面のみ黒色に燻焼するA類のみが出土している。これらはすべて高台付椀であると思われる。

137は直線的に開く体部である。口唇付近内面は細かいヘラミガキが施される。内面のヘラミガキは全体としてタテ・ヨコ交差させ、ヘラの単位が不明瞭なほど丁寧なものである。胎土には石英・金雲母を含み、外面は淡茶褐色を呈する。

138は高台部分である。底部の縁辺部分に垂直気味に立つ高台である。胎土には石英・砂粒を含み、外面は



第25図 出土土器実測図 (12) (1/3)

4. 墨書土師器 (第22図 142~143)

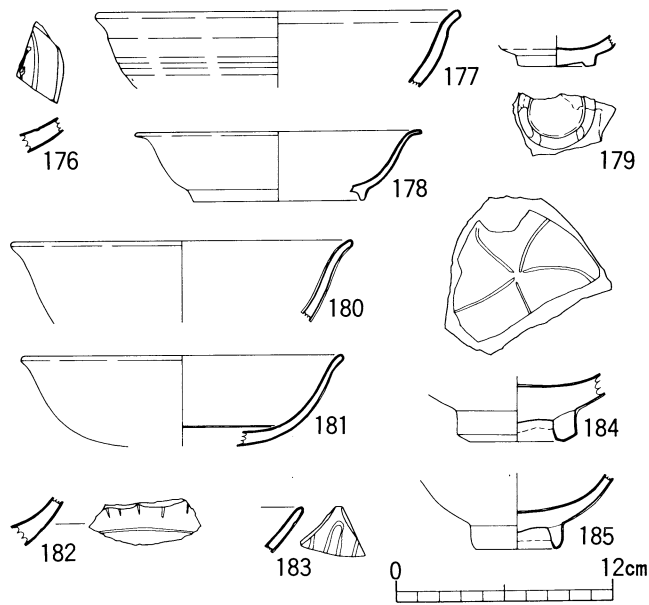
142は、体部外面に墨書されているものである。「糸」の一部ではなかろうか。143は外底部に墨書される。「十」であろう。体部は意図的に割られ、中央付近には穴がある。紡錘車の未製品の可能性がある。いずれも肉太の文字である。

5. 紡錘車 (第22図 144~146)

出土した紡錘車はすべて破片で、接合もされなかった。土師器の底部の再利用品である。外底面と思われる面は、ヘラ切り未調整のままである。また側面は研磨によって面取りが行われている。146は「+」字状の線刻が施されている。

6. その他の土製品 (第22図 147・148)

147は算盤玉状の有孔土製品である。上方に沈線があり、一部剥離しているもののほぼ全体



第26図 出土土器実測図 (13) (1/3)

に赤色の顔料を塗っている。これはベンガラであることが分かった。胎土には石英や砂粒を多く含む。復元最大径4.8cm、高さ2.8cmである。148は円盤型土製品で土師器底部の再用品である。外底面はヘラ切り未調整で、側面は研磨されている。

7. 須恵器

(第25図 162~174)

杯 (162・163) 共に体部が開きながら口縁付近で緩やかに外反するものである。162は復元口径16.2cmで調整はヨコナデによる。胎土

には石英を含み、青灰褐色を呈する。163は口径ははっきりしない。これも調整はヨコナデによる。胎土には砂粒を含み、灰褐色を呈する。

蓋 (164) 復元口径13.7cmで、上方にカキ目が残る。胎土には長石・砂粒を含み、赤紫褐色・青灰褐色を呈する。

甕 (165~173) 165は口縁部で外面下方に二条の波状文が施される。更に内外面に自然釉がかかる。胎土には石英・砂粒が含まれ、灰褐色・乳褐色を呈する。166~173は胴部の破片である。166は外面に格子状叩き、内面に平行状当て板痕跡が残る。胎土には長石・石英を含み赤褐色・灰褐色を呈する。172は外面に平行状叩き、内面に同心円状の当て板痕跡が残る。胎土には石英・砂粒を少々含む、灰褐色・青灰褐色を呈する。167~171・173は同一個体である。外面に平行状叩き、内面に繊維状の同心円当て板痕跡が残り、ナデによって調整する。胎土には長石・石英・礫・軽石を含み、灰褐色・青灰褐色・赤紫褐色を呈する。

播鉢 (174) 須恵質の播鉢である。口縁部で内面にヨコナデが施され、縦方向に沈線が施される。外面には上方にカキ目、その下方にナデが施される。胎土には長石・石英・砂粒を含み青灰褐色を呈する。

8. 瓦器 (第25図 175)

瓦質の播鉢である。口唇から内面にかけてヨコナデが施され、更に内面に縦方向の沈線が施される。外面の調整はナデである。胎土には長石・石英・砂粒を少々含む、青灰褐色・灰褐色を呈する。

9. 白磁 (第26図 176~179)

すべてI層出土のものである。176は体部で底部に近い部分である。内面に線刻による紋様が施される。胎土は乳褐色を呈する。釉には貫入がみられる。177は碗で復元口径が17.1cmを測る。口唇付近は釉が欠けている。胎土は濁白色で、色調は灰褐色を呈する。178は高台付皿で口縁が横に広がるものである。復元口径13.4cm, 復元高台径7.9cm, 器高3.3cmである。胎土は乳褐色を呈する。高台部分の179は下面にケズリが施されている。釉は薄く、貫入も見られる。胎土は乳褐色を呈する。

10. 青磁 (第26図 180~185)

I層及びII層出土のものである。180は碗で口縁が外反し、復元口径16.0cm。やや厚めの釉薬を付ける。胎土は濁白色を呈する。181も碗で、復元口径15.1cm。釉には貫入が見られる。胎土は青灰褐色を呈する。182は体部の下半である。外面には線刻による紋様が施される。胎土は灰褐色を呈する。183も同様に外面に紋様が施される。口縁付近である。184は高台付近で太い高台が付く。内面に線刻による紋様が施される。高台径は5.6cm。胎土は青灰褐色を呈する。185も高台付近であるが、体部は丸みが強く、高台径が4.5cmとやや小さい。胎土は濁白色を呈する。また外底面はヘラケズリによって調整され、赤紫褐色を呈する。

第4表 土師器等観察表 (調整 A:ヨコナデ B:ヘラミガキ C:ヘラケズリ D:ナデ E:刷毛目)

挿図 番号	遺物 番号	器種	出土区	層	口径	底径	高台径	器高	調整		備考
									(外)	(内)	
20	110	小甕	A-3		11.0				AD	AC	掘立柱建物
	111	杯	A-3			7.0			AC	AD	ヘラ切り土坑1
	112	甕	B-4						AD	AC	ピット
	113	甕	B-3						AE	A	ピット
21	114	杯	B-3	II	13.9	9.0		3.6	AC	AD	ヘラ切り
	115	椀	A-2	II	18.5				AC	A	
	116	皿	A-1	I	15.4				AC	A	
	117	椀	A-3	II	13.1				AC	AD	
	118	杯	A-3	III	14.4	10.0		4.1	A	A	
	119	杯	A-3	II	12.6	7.4		3.9	AD	AC	ヘラ切り
	120	杯	B-3	I	14.0				A	A	
	121	杯	B-3	II	13.0				A	A	
	122	椀	B-2	III	14.0				A	A	
	123	椀	A-2	II	13.9				A	A	
	124	椀	B-2	II	13.4				A	AD	
	125	杯	A-2	I	11.0				不明	不明	
	126	皿	B-3	II	15.2	9.3		3.2	A	AD	
	127	皿	A-2	II	18.3				AD	A	
22	128	杯	A-2	II		6.7			AD	AD	ヘラ切り
	129	杯	A-2	II		7.2			A	A	
	130	杯	B-3	III		5.6			A	A	ヘラ切り
	131	杯	A-3	III		8.2			A	A	
	132	杯	A-3	II		5.8			A	A	
	133	杯	A-3	I		7.3			C	AE	ヘラ切り
	134	杯	B-3	II		6.8			C	AD	ヘラ切り
	135	小皿	A-3	I	6.3	4.1		2.0	A	A	糸切り
	136		B-2・3	II		9.1			AC	AD	
	137	椀	B-3	II	16.5				A	B	黒色土器A類
	138	椀	A-2	II				6.2	A	B	黒色土器A類
	139	椀	B-3	III	15.1				AB	B	黒色土器A類
	140		A-2	II			7.4		A	A	刻書土師器
	141		A-2	I			6.8		A	A	刻書土師器
142		B-3	II	16.1				A	A	墨書土師器	
23	149	甕	A-2	II	32.4				A	AC	
	150	甕	A-4	III	28.2				AE	AC	
	151	甕	A-1	III	26.4				A	AC	
	152	甕	A-2	II	28.0				A	AC	
	153	甕	A-2	II	20.0				AC	AC	
	154	甕	B-3	II	15.6				A	C	

(法量 単位: cm)

第Ⅵ章 ま と め

本遺跡は、始良郡蒲生町の北部に位置している漆地区の北西部に所在している。この漆地区は、山々に囲まれた盆地となり、この盆地の中央部を別府川がほぼ南北に流れている。

この漆地区には、旧石器時代の槍先形尖頭器をはじめ縄文時代早期の遺跡が多く、奈良・平安時代の遺物なども採集されている。

発掘調査は、平成3年度の確認調査の結果に基づき、基幹市町村道の整備事業（県代行）に係わる部分の約2128㎡について調査を実施した。

遺跡の環境について、若干ふれてみれば、本遺跡は盆地内に立地しているということで、これまでの調査の結果、広範囲に及ぶ遺物散布地が確認されている。本遺跡では、歴史時代から縄文時代晩期・早期の遺物包含層が確認された。そこで、アカホヤの下位層についてみれば、Ⅳ層は縄文時代早期の遺物包含層で、その下位がシラスの二次堆積層となる。この層に含まれる黄色の色調を示す軽石は、もともと白色を呈していたもので、数百年をもって漸移し白色が黄色へと変化したものと考えられている。^① さらに、下位層の黒色粘質腐植土は、この地が湿地帯であったこと示すもので、この色調を呈する層が植物等の腐植土で構成され、その中にシラスの層をも含み互層をなし、かなりの植物繊維を含み、甚大な含水の層でもある。その下位層は、砂層や大小の礫で構成され、礫のなかには人頭大よりかなり大きいものも含まれる。この湿地帯が安定した段階で、シラスの二次堆積層の流入土があり、この層が安定した時期に遺跡地として人々の生活が営まれ、この盆地内に遺跡が立地し今日まで人々の生活がひきつがれる環境であったと考えられる。ちなみに、本遺跡の泥炭層の堆積年代を知るために泥炭層中の泥炭の¹⁴C年代測定を実施した。その結果、9960±170y.B.P（8010B.C）の値が提示された。^② 「泥炭層と層序と堆積構造が不明だが、9960±170y.B.Pであった。縄文時代早期初頭頃の時期に、湿地の環境下で形成した堆積物と考えられる。」^② との考察が加えられている。

調査の結果、遺跡地が東側から南西側へ傾斜しているためかなりの客土があり、調査区によってはⅣ層やⅤ層まで削平を受けた箇所もあった。

Ⅱ層及びⅢ層の一部について遺存はよくなかったが、Ⅱ層は歴史時代の遺物包含層で、掘立柱建物跡などの遺構をはじめ土師器、黒色土器、刻書土師器、墨黒土師器、瓦器、紡錘車、青磁、白磁などや砥石、鉄滓などの遺物が見られ、Ⅲ層は縄文時代晩期相当層で、刻目突帯文土器を中心とした遺物が、Ⅳ層は縄文時代早期の遺物包含層である。

縄文時代

Ⅲ層の土器には、刻目突帯文土器の深鉢を中心に、鉢、浅鉢、粗製の深鉢、鉢などのほか組織痕土器もあった。これらの資料の刻目突帯文土器には、小破片であったが、孔列土器の資料も見られる。一方、石器には、打製石鏃、石匙、石錐、磨製石斧、磨石兼敲石、石核、石槍、剥片石器などが出土した。

Ⅳ層の土器は、縄文時代早期の塞ノ神式土器で、復元完形2個体の資料が見られる。

縄文時代早期

この時期の出土遺物は、ごく限られた地点より復元完形の土器破片が2ヶ所より出土した。

1は、調査区のほぼ中央部付近で、2と同様にごく限られた地点より復元完形の資料が出土した。この資料が出土した周辺部は、この時期の遺物が皆無であったことや急傾斜はないが、2の資料が出土した地点より東側眼下の近距離にあり、西側遺跡地より流れ込みの可能性が考えられる。

2は、トレンチ調査であったが、調査区の北側にある高位の畑地より出土したものである。この出土状況より見れば周辺部が大幅な削平を受け、僅かに遺存していた。このことは遺跡地が傾斜していた関係で後世の耕作等も手伝ってか、耕作地の造成時を含めて、その部位だけ残存していたことになる。

1・2ともに縄文時代早期後葉の塞ノ神式土器に比定される資料である。1は貝殻文系の土器で、2は燃糸文系の土器である。1は始良郡加治木町三代寺遺跡^③で多量に出土したタイプに類似し、2は始良郡始良町鍋谷遺跡出土の土器に類似している資料である。^④ 1は、河口貞徳氏の塞ノ神式B d式土器に、2は塞ノ神式A b式土器に比定されるものである。^④ 一方、これらの資料は、新東晃一氏によれば、1の資料が三代寺式土器に、2が鍋谷式土器に比定されているものである。^⑤

縄文時代晩期

土器について

3～6, 8～14, 16～18, 25, 26, 29, 32～42, 46～50は、刻目突帯文土器の深鉢か鉢が、27, 28, 30, 31, 43～45は、粗製の深鉢か鉢が考えられる資料である。ともに、小破片のため全体的な器形は知り得ないために、傾きや器種などにも疑問が残る。それぞれの資料について特定するまでにはいたらなかった。

刻目突帯文土器は、その分布が遠賀川流域系弥生式土器の分布と重なることから注目され、縄文文化から弥生文化への移行を考える上で重要な資料である。^⑥ 県下において、これまで知見するところによれば、高山町東田遺跡、^⑦ 鹿屋市柿窪遺跡、^⑧ 根占町貫見原遺跡、^⑨ 打揚遺跡、^⑩ 本遺跡を含め59遺跡^⑪が知られている。

本遺跡の資料は、山ノ寺・夜臼Ⅰ式の時期のものも見られるが、そのほとんどが夜臼Ⅱ式の時期に捉えられ、高山町東田遺跡では、夜臼Ⅱ式の時期から板付Ⅰ式の時期の時間的な存在幅が考えられるとの見方もある。^⑫

刻目突帯文をもつ孔列土器が13～15の資料で、15は孔列文より上位を欠損している。県下では最近の資料として高山町東田遺跡からの出土例があり、鹿屋市榎木原遺跡、人吉市のアンモン山遺跡、鹿屋市水の谷遺跡、志布志町小迫遺跡などは黒川式土器の時期に比定され、このほか未報告例として都城市の中尾山馬渡遺跡が報告されている。^⑬ そこで、本例や東田遺跡、そして柿窪遺跡は刻目突帯文期の時期に捉えられる。下山覚氏によれば、基本的に「孔列土器」と呼ばれる土器は、「孔列」を施す以外在地の土器形式に帰属されうる。時間的には、黒川式土器

土器後半期刻目突帯文土器の時期の存在幅が捉えられる。¹³ との見方がしめされている。

石器について

これらの石器は、蛋白石を素材に用いた石鏃や石核、残核、そして多量の剥片やチップがみられた。調査地区の限定もあったが石鏃以外の定形石器は少なかった。この蛋白石は、米丸の原産地¹⁴に近いめか容易に手に入りやすく多く用いられている。

歴史時代

出土した遺物のうち、古墳時代以降のものはいくつかの時期に分けられるので本書では章立として「歴史時代」という表現をとっている。

出土遺物には、土師器・黒色土器A類・須恵器・紡錘車・瓦器・青磁・白磁などがある。これらはA・B-2・3区に集中して出土する。

土師器の器種には杯・椀・皿・小皿・甕・壺がある。土師器の多くは焼成後に更に火熱を受けている点の特徴である。これは焼土が数地点で確認されていることと関係があるかもしれない。形態的特徴として、杯の体部外面下半に回転ヘラケズリが施されているものが存在する点が上げられる。これは底部切り離しの際に何らかが当たってついた痕跡と思われるものもあるが、かなり意図的に調整しているものも存在する。このようなヘラケズリの例は東郷町五社遺跡¹⁵や鹿屋市西丸尾遺跡¹⁶にみることができるが、この2者の例と本遺跡の例とは法量の点で大きく差異がある。今後さらに検討を加える必要がある。底部の切り離し方としては小皿のみが回転糸切りである以外はすべてヘラ切りである。こういった点からも土師器にも2つ以上の時期のものがあるといえる。

須恵器には甕・壺・杯・蓋がみられた。須恵器の器種が割り合い多い点が指摘できる。

須恵器と瓦器に播鉢がみられた。この須恵器は先に述べたものとは別の群に属すと思われる、恐らく先のが古代のものであるとすれば、中世に位置づけられるものである。

青磁・白磁は13～15世紀の中国からの輸入陶磁器である。

これらのことから、南九州の歴史時代の土器研究はまだ不十分であるが、本遺跡の土器は大きく古代と中世のものに分けられるだろう。層位的にもそれはいえる。さらに細かい時期の検討は、今後に譲るとしても古代のものは須恵器や土師器により、9世紀前半より古く位置づけることもできるのではないと思われる。また、中世のものは陶磁器により13～15世紀のものであろう。土師器小皿もこの範疇に入ることができるとと思われる。多くはI層出土である。

次に、遺構は掘立柱建物・土坑・溝状遺構・古道・ピット・焼土が検出された。埋土や切り合い関係から溝状遺構と古道はほかの遺構とは時期の下るものと思われる。

掘立柱建物は3×2間と2×1間の棟が検出されたが、これらは主軸方向が北～南でほぼ一致している。同時期のものである可能性が高いが、ピットがかなり削平された状態で検出されたため、その詳しい規格性を捕らえることはできなかった。時期の検討であるが、ピット中に土師器が見られたが、埋土の状況がはっきりしていないため困難であった。

古道と溝状遺構はこれと異なり遺物はほとんど見られなかったが、中世以降のものであろう

と考える。遺物も流れ込みの可能性が高い。

参考資料

- ① 鹿児島大学法文学部 森脇広明教授のご教示による。
- ② パリノ・サーヴェイ株式会社の分析結果報告による。
- ③ 鹿児島県教育委員会「三代寺遺跡」鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書(11) 1979
- ④ 河口貞徳「塞ノ神式土器」鹿児島考古 6号 1972
- ⑤ 新東晃一「塞ノ神式土器再考」日本民族・文化の生成 1988
- ⑥ 家根祥多「縄文土器から弥生土器へ、縄文から弥生へ」帝塚山大学 1984
- ⑦ 鹿児島県立埋蔵文化財センター「東多遺跡」鹿児島県立埋蔵文化財発掘調査報告書(6) 1993
- ⑧ 鹿屋市教育委員会「柿窪遺跡・城ヶ崎遺跡・大久保遺跡」鹿屋市埋蔵文化財発掘調査報告書(7) 1987
- ⑨ 根占町教育委員会「貫見原遺跡」根占町埋蔵文化財発掘調査報告書(1) 1989
- ⑩ 1992・10に工事中発見による。
- ⑪ 坪根伸也「出水郡高尾野町内採集の刻み目凸帯文土器について」『鹿大考古学会会報』第5号 1986
- ⑫ 藤尾慎一郎氏ご教示による。
- ⑬ 下山覚『いわゆる「孔列土器」について』『鹿大考古学会会報』第5号 1986
- ⑭ 宮田栄二氏教示による。
- ⑮ 東郷町教育委員会「五社遺跡」東郷町埋蔵文化財発掘調査報告書(1) 1986
- ⑯ 鹿児島県教育委員会「西丸尾遺跡」鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書(64) 1992

竹牟礼遺跡¹⁴C年代測定について

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

竹牟礼遺跡は鹿児島県始良郡蒲生町に所在する。遺跡には泥炭からなる堆積物が確認されている。ここでは、泥炭層の堆積年代を知るために放射性炭素年代測定（¹⁴C年代測定）を行うこととした。

1. 試料

試料は、竹牟礼遺跡の泥炭層中から採取した泥炭1点（試料番号6）である。

2. 方法

測定は、学習院大学放射性炭素年代測定室が行った。

3. 結果

結果は、表1に示した。

表1 ¹⁴C年代測定結果

試料番号	出土場所	質	Code No.	年代（1950年よりの年数）
6	泥炭層中	泥炭	GaK-16798	9960±170y. B. P(8010 B. C)

なお年代値の算出には¹⁴Cの半減期として、LIBBYの半減期5570年を使用しています。また、付記した誤差はβ線の計数値の標準偏差σにもとづいて算出した年数で、標準偏差（ONE SIGMA）に相当する年代です。また試料のβ線計数率と自然計数率の差が2σ以下のときは、3σに相当する年代を下限の年代値（B. P.）として表示してあります。また試料のβ線計数率と現在の標準炭素（MODERN STANDARD CARBON）についての計数率との差が2σ以下のときには、Modernと表示し、δ¹⁴C%を付記してあります。

4. 考察

泥炭層の層序と堆積構造が不明だが、年代値は9960±170y. B.Pであった。縄文時代早期初頭頃の時期に、湿地の環境下で形成した堆積物と考えられる。

圖 版



1、調査地及び周辺地形（航空写真）北側上空より



2、調査地及び周辺地形（航空写真）上空より



1、調査地及び周辺地形（航空写真）北側上空より



2、調査地及び周辺地形（航空写真）上空より



1、発掘調査風景 (A-3区)



2、遺物出土状況 (B-5区からA・B-4区)



3、遺物出土状況 (A-1・2区)



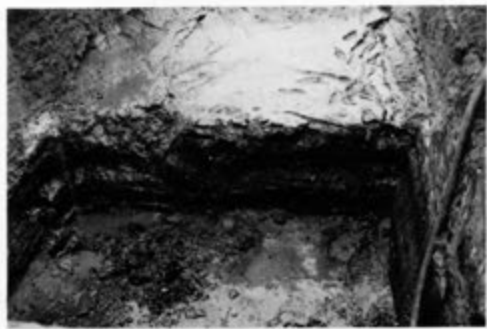
4、漆小学5・6年生見学風景



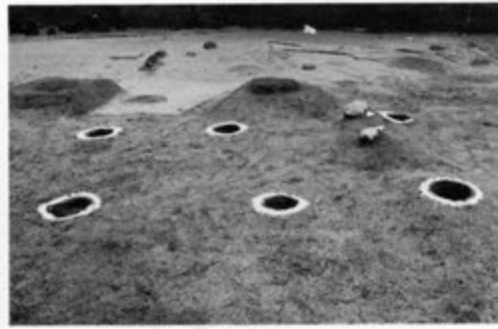
5、土層断面 (A-3区)



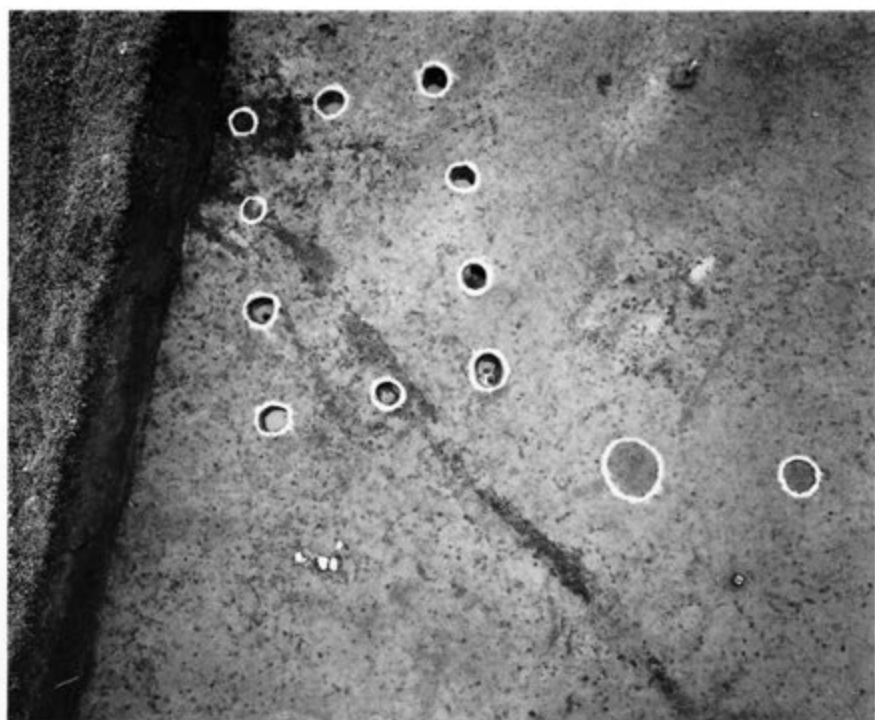
6、土層断面 (A-1~3区)



7、泥炭層 (C-3区)



8、掘立柱建物2号 (B-2区)



1、掘立柱建物1号（航空写真）



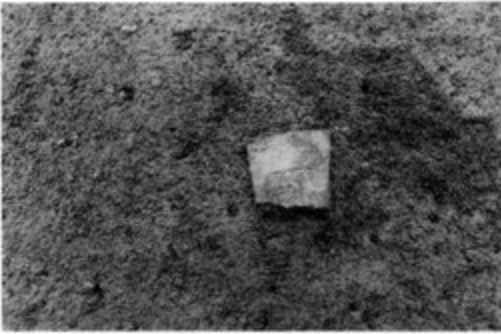
2、掘立柱建物2号（航空写真）



1、掘立柱建物1号 (A-3区)



2、溝状遺構 (A・B-4区)



3、墨書土器 (142) 出土状況



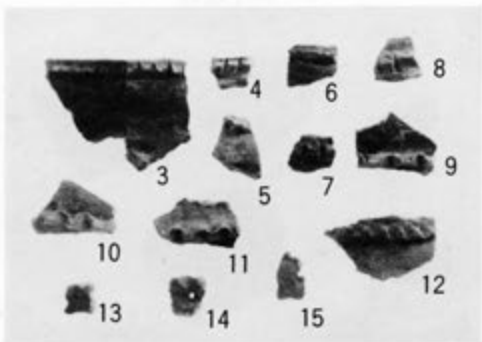
4、土器底部 (63) 出土状況



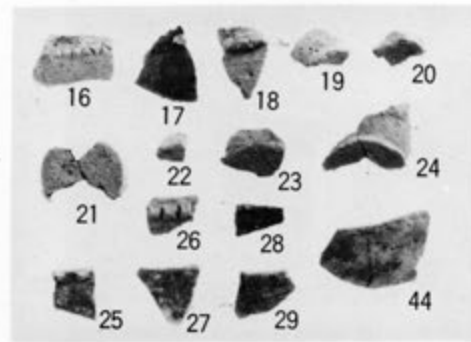
5、縄文土器 (2) 出土状況



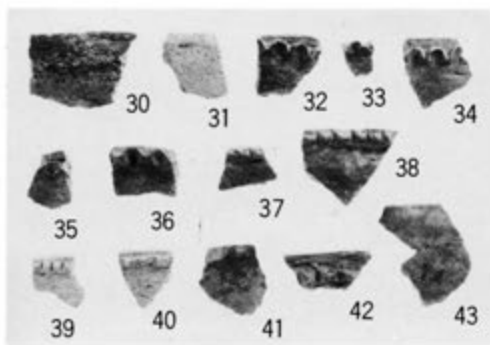
6、縄文土器 (1) 出土状況



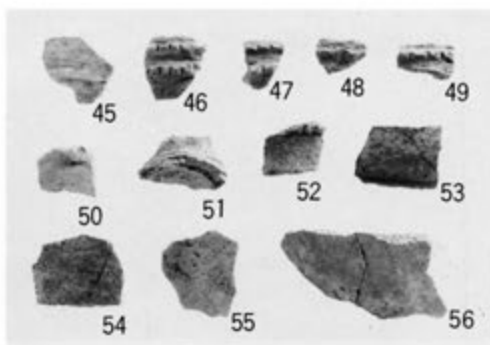
7、出土遺物



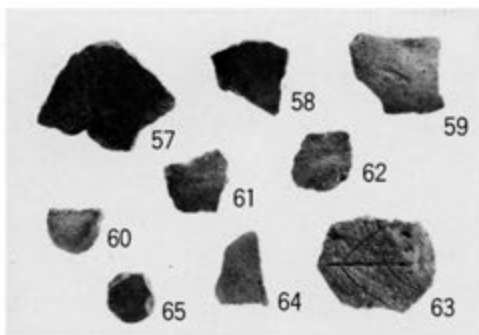
8、出土遺物



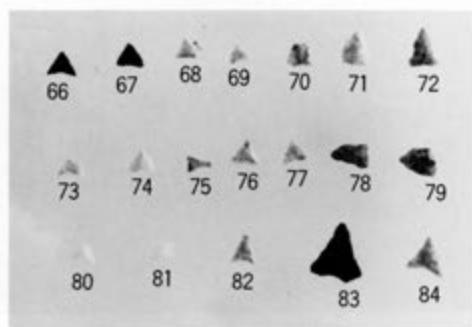
1、出土遺物



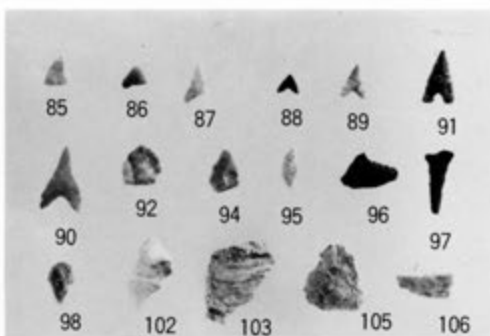
2、出土遺物



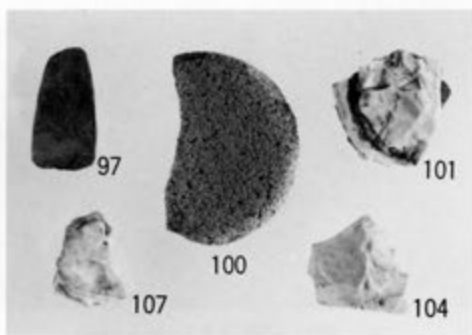
3、出土遺物



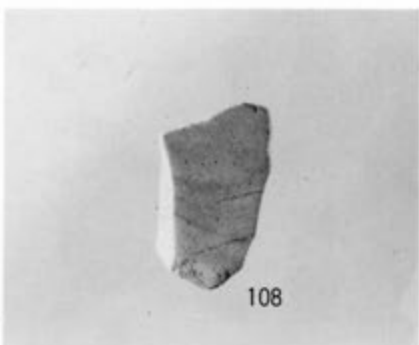
4、出土遺物



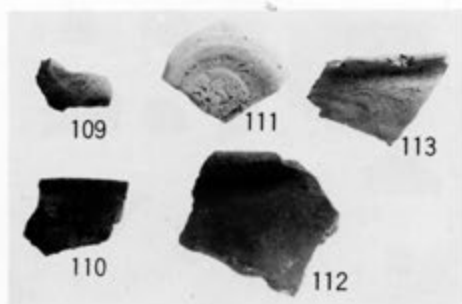
5、出土遺物



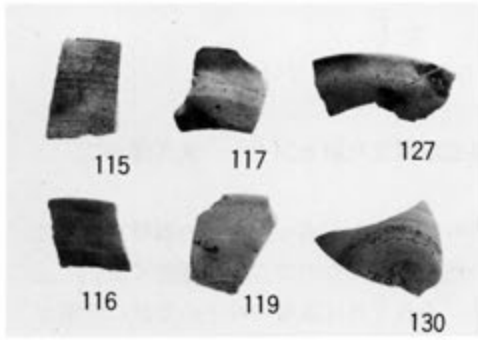
6、出土遺物



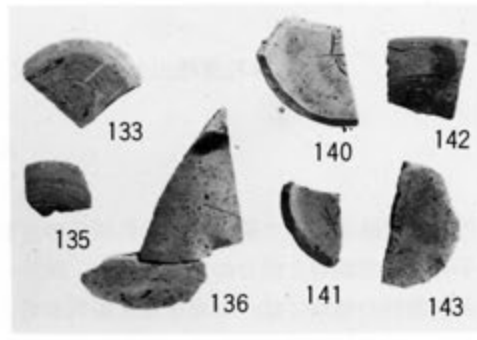
7、出土遺物



8、出土遺物



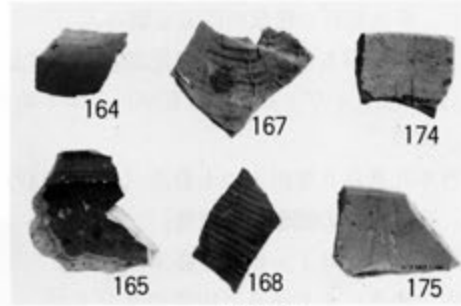
1、出土遺物



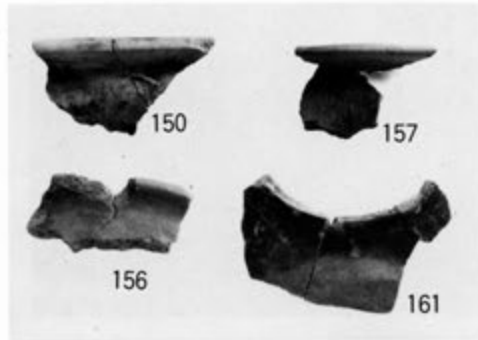
2、出土遺物



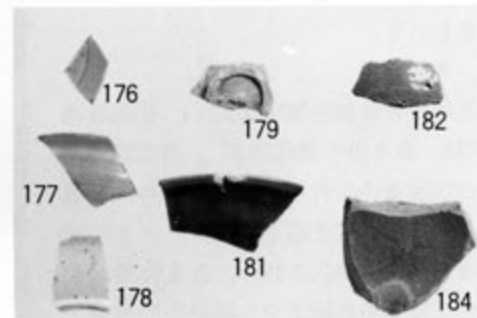
3、出土遺物



4、出土遺物



5、出土遺物



6、出土遺物

竹牟礼遺跡出土の土製品に、赤色顔料の付着が認められるものがあった。その顔料について粒子の形状の観察と成分の分析を行い、顔料の種類を同定を試みたのでここに報告する。

赤色顔料の種類にはベンガラと水銀朱が考えられる。それぞれは顔料の粒子の形状に特徴があるようであり、主成分もベンガラは酸化第二鉄 (Fe_2O_3)、水銀朱は硫化水銀 (HgS) と大きく異なっている。今回は主にEDSによるX線分析(成分分析)で検出される元素をもとに、赤色顔料の種類を同定を試みた。

分析に使用した機器は、鹿児島県立埋蔵文化財センター所蔵の日本電子製走査型電子顕微鏡(低真空タイプ・LV-SEM)とエネルギー分散型X線分析装置(EDS)である。

1. 試料

竹牟礼遺跡Ⅱ層出土の土製品(第22図147)に塗彩された赤色顔料

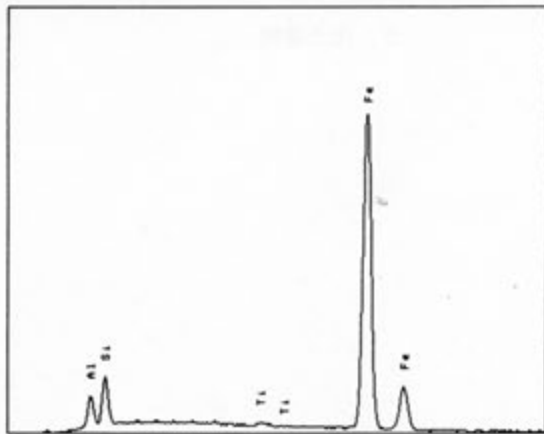
2. SEM像の観察(組成像)

顔料の粒子は $1\mu m$ 弱の非常に微細なものである。よく見ると中空のリング状のものが多く見られ、パイプ状粒子の先端部、あるいはその細かく砕かれたものと思われる。



3. X線分析

X線分析は加速電圧20KV、有効時間100秒、取り出し角度 20.2° 、作動距離20mmの測定条件で行った。検出された元素のスペクトル図を右下に示す。Feの顕著なピークが検出された。AlとSiのピークは土器の胎土や土壌からの汚染である可能性が高く、試料自体の主成分はFeであると思われる。



4. 分析結果・まとめ

X線分析の結果Feのピークが認められたので、本試料は酸化鉄を主成分とするベンガラであり、粒子の形状はパイプ状と考えられる。筆者は分析した範囲では鹿児島ではパイプ状粒子を含むベンガラの出土例が多く、今後、さらに分析試料の増加を図りたい。

あ　と　が　き

竹牟礼遺跡は、蒲生町漆の盆地内の水田と畑地に所在する遺跡であり、槍先形尖頭器が表採されたことでよく知られている。

今回の調査では、この時期のものとの遭遇はなかったが、歴史時代を中心とする遺構や遺物、そして縄文時代の遺物など多くの試料を提供してくれました。なかでも、塞ノ神式土器は、貝殻文系と撚糸文系の完形品2個体分の提供があり、日々水との戦いであった作業員さんたちにとって意義ある出会いであった。

このたびの調査において、ご協力をいただいた加治木土木事務所、蒲生町経済課、蒲生町教育委員会の関係者、山内工務店をはじめ発掘作業に従事していただいた地元の方々、整理作業に従事していただいた埋蔵文化財センターの作業員の方々に心より感謝の意を表したい。

発掘作業員

湯脇盛男、伊黒親、木原敏臣、上脇澄孝、森田八重子、木原幸子、川畑フミ子、森田トミエ、崎山フクエ、藤田キミ子、長倉弘子、湯元フジエ、尾辻ヨシエ、篠原千代美、小原タツ子、宮地厚子、宮地とも子、染川アサ子、染川アイ子、田代ケサエ、竹下忠、山本一豊、岩下一喜、外園陽子、橋口玉子、原田進

整理作業員

高倉晴美、相良政子、郷司山いつ子、川野高子

鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(5)

竹　牟　礼　遺　跡

1993年3月

発　行　鹿児島県立埋蔵文化財センター

〒899-56　鹿児島県始良郡始良町平松6252番地

印　刷　かわち印刷有限公司

〒890　鹿児島市中央町27-16